

常磐短期大学研究紀要

第 44 号 (2015年度)

目 次

原著論文

- 格差の構造と役割業績主義 —新たな社会的リスクとの関係で— …… 安田 尚道 1
- 星野徹のイーディス・シットウェル批評…………… 菅野 弘久 34

研究ノート

- 保育所におけるトイレ環境のあり方が保育や子どもの発達に与える影響について
…………… 村上八千世、寺田 清美 35

報告

- 本学に於ける能動的学修の拡充について…………… 紙透 雅子 43

翻訳

- 好ましい英語と通じる英語…………… 村松 俊子 53

常磐短期大学

平成28 (2016) 年 3 月

格差の構造と役割業績主義
— 新たな社会的リスクとの関係で —

安田 尚道

THE STRUCTURE OF DISPARITY AND HUMAN RESOURCE MANAGEMENT
— IN RELATION WITH NEW SOCIAL RISKS —

This paper clarifies the structure of disparity from the point of view of relationship between human resource management and the Quality of Life.

Around 2010, many companies introduced the role-performance based system (yakuwari-gyouseki shugi in Japanese) which was a human resource management. This system is composed of abilities to carry out jobs and a role which is made up of jobs and positions. This system forms four quadrants: Firstly, long forming period of abilities and low importance of a role. Secondly, long forming period of abilities and high importance of a role. Thirdly, high importance of a role and short forming period of abilities. Fourthly, low importance of a role and short forming period of abilities. Some employees in the first and second quadrant are employed as regular employees. Other employees in the third and fourth quadrant are employed as non-regular employees. Most of labors in the third and fourth quadrant are lower skilled women, who find most difficulty in balancing work and family, poor education. They are vulnerable to the new social risks and the risk of social exclusion.

はじめに

2000（平成12）年を前後して格差は社会的な問題として認識されるようになった。1991年以降展開するグローバル競争と産業構造のポスト工業化の過程で労働市場が二極化し、これをめぐって格差が議論され始めたからである。現在、企業では、その一極である正規労働者が企業の持続的な発展のための経営戦略を構想し、非定型的な仕事を執行するためのコアな従業員として、もう一つの極である非正規労働者がこの戦略（計画）に基づく定型的な仕事を担う周辺的な従業員として位置づけられている。各企業における人事労務管理がマクロ的な労働市場の二極化を生み出した。このミクロ的な人事労務管理の原理となったのが役割業績主義であった。

ところで、最近では、人事労務管理と労働者の生活が個別に研究される傾向にあり、人事労務管理は人的資源管理として企業業績との関係で論じられることが多い¹⁾。しかし、人事労務管理が労働能力とその所有者としての労働者と売り手としての労働者にかかわる管理である以上、人事労務管理の変化は労働者の生活に大きく影響する。そこで、本稿では労働者の生活の観点から現在の人事労務管理の原理である役割業績主義の特徴と格差発生との関係を明らかにする。これにより人事労務管理と人間生活問題の関係が改めて認識されるのである。

I 人事労務管理と社会関係

格差問題は専門分野を超えて活発に議論されてきた。たとえば経済学では非正規労働を原因とする世帯所得の不平等がジニ係数を中心に明らかにされ（橋木）、これに対してこの不平等は高齢化の進行と単身世帯の増加によるものであることが指摘された（大竹）。これらの経済学的知見は主に所得に注目した格差論であった。他方、これらの知見に基づき社会学では貧困の世代間継承や教育格差などが指摘され（山田、青木）、所得格差の子どもへの影響が子供の貧困問題として明らかにされた。ここでの観点は生活の質（QOL、Quality of Life）であり、同様な観点から福祉国家論でも生活保障システムとの関連で「新たな社会的リスク」や社会的排除が指摘された（大沢²⁾。つまり、これらの格差社会論によると、労働市場における非正規労働者としての雇用と低賃金は低所得とこれに基づく教育格差と貧困の世代間継承をもたらし、場合によっては彼らの社会的排除に至る。労働市場の二極化による所得格差は低所得者あるいは貧困者の生活の質を下げ、社会とのかかわりを狭隘化した。

これらの研究は労働市場で決定された非正規雇用とこれに基づく労働時間と賃金が労働者の生活に重大な影響をもたらすことを明らかにしているが、ここでは格差発生のプロセスが十分に検討されていない。非正規労働がどのような産業で発生し、どのようなメカニズムで生まれ、それがなぜ低賃金であるのか、そしてどのような労働者がそこに雇用されるのか、すなわち労働市場に登場する以前の経営と労働者の生活事情が明白にされていない。格差発生のプロセスとして労

働市場に出現する前の企業の経営と労働者の生活事情と労働市場でのマッチングの特徴が明らかにされなければならないのである³⁾。

人事労務管理こそ格差発生 of 構造を解明するカギである。人事労務管理は企業の生産にかかわる組織過程（PDCAサイクル）と労働者の生活過程の結節点であるからだ。経営戦略すなわち計画（P）は市場で競争優位となるように構想され、これが組織を通じて執行され（D）、この実績は計画を基準として統制され（C）、これに基づき改善され、次期の戦略や計画に生かされる（A）。これらの組織過程を担う労働者は人事労務管理により調達（雇用）され、彼らの能力が発揮される。これらの人事労務管理の「主要管理的プロセスについての方向の明白化」（森五郎、1966/74/86、98頁）したものが労務方針である。他方では、この方針のもとで雇用された労働者は経営内において縦、横、斜めの社会関係を形成しながら働き、時として生活を維持、向上させるために労働力の売り手として時間と賃金をめぐって経営側と交渉する。労働者はこうして生活の経済的、社会的基礎を形成する⁴⁾。役割業績主義こそ現代の労務方針である。

ところで、日本の雇用慣行は周知のように高度成長期から安定成長期において好業績を達成した日本の経営を支えた人事労務管理である。これはまた安定した年功賃金による物質的豊かさを労働者にもたらした一方、男性中心の残業の多い働き方により男性労働者の家族生活や社会生活に費やす時間を狭隘化した。これらの働き方が可能になるのは、労働者が形成する経営における社会関係が家庭生活における性別役割分業観に基づく男性稼ぎ主モデル（male breadwinner、P.Taylor-Gooby、2004）の観念を許容するからであった。

ところが、1991（平成3）年のバブル崩壊以降、経営者はリストラクチャリング（事業の再構築）による事業の選択と集中およびリエンジニアリング（仕事の合理化）による人員と人件費の抑制を図った。このマクロ的な結果が後述する産業構造と雇用構造のポスト工業化であった。この過程で経営者は雇用のポートフォリオや業績主義を模索した一方⁵⁾、日本の雇用慣行が崩壊し始め、労働者は終身雇用と年功制を前提とした生活の見通しをもてなくなった。生活的不安定感が増し、生活維持のために多くの女性が非正規労働者として労働市場に参入するようになった。確かにこの非正規労働者の増加は経営者が非正規従業員の増加により必要な要員を満たそうとしていることを示している。その一方で、このことは、ワーク・ライフ・バランスによる男女の平等を求め家族観が流布されているにもかかわらず、現実的には日本の家族が性別役割分業観に基づく安定した配偶関係にある働き方を求め、非正規労働を求めていることも示しているのである⁶⁾。

このように、現在の人事労務管理は役割業績主義や性別役割分業とワーク・ライフ・バランスに揺れる家族を結び付けながら、マクロ的な格差問題を発生させている。これを解明するためには、労働市場に現れる以前の企業の組織過程と労働者の生活過程を明らかにし、そのマッチングの特徴を人事労務管理との関連で明らかにする必要がある。本稿はこの格差発生のプロセスを検討するための一作業として、非正規労働が低賃金労働としてどのような産業でどのように発生しているのかを組織過程に現れた人事労務管理との関係で明らかにするのである。

Ⅱ 雇用構造のジェンダー化と低賃金

(1) 雇用構造のジェンダー化

格差発生のプロセスに大きな影響を与えているのが産業構造のポスト工業化である。日本においても産業構造は1990年代以降急速にポスト工業化し、これに基づき雇用構造も製造業中心から多様なサービス業中心へと急速に移行した。製造業（産業大分類）の雇用者数は、バブルが崩壊した翌年1992（平成4）年に1382万人を数え、製造業で働く絶対数は戦後のピークを迎えたが、これ以後低下し、2012（平成24）年には919万人にまで減少した。しかし、全雇用者に占める製造業の比率はすでに1963（昭和38）年（36%、951万人）から低下し、1992（平成4）年の27%を経て2012年（平成24）年には18%に至る（以上、図表1）。1991（平成3）年以降、激しいグローバル競争のなかで低成長が続き、製造業の空洞化を埋めるかのようにサービス業が多様に展開したのである。

G.エスピン-アンデルセン（G.Esping-Andersen）によると、ポスト工業化産業は生産者サービス（ビジネスコンサルタント、金融、保険、不動産）、社会サービス（医療、教育、福祉）、対人サービス（レジャー、飲食業）からなる。当然、この産業の雇用者数の増加は伝統的な工業社会に関連する産業（鉱業、製造業、建築、運輸）や時代にかかわらず存在する産業（行政、流通）での雇用者数を相対的にも、絶対的にも低下させる。しかも、「ポスト工業化段階の仕事は格付けの高い仕事と格付けの低い仕事の混合で」あり、「前者には管理職、専門職や科学的、技術的な職種など、高度の人的投資に支えられた職種が含まれ」、「後者は従属的で定型的な仕事からなる」（Esping-Andersen,1990,209-20頁）のであった。

G.エスピン-アンデルセンの指摘にしたがうと、日本のポスト工業化産業は産業大分類上では「情報通信業」や「金融業・保険業」、「不動産業、物品賃貸業」、「学術、専門・技術サービス」などの生産者サービスや「医療、福祉」や「教育、学習支援」などの社会サービスそして「宿泊業、飲食サービス業」、「生活関連サービス業、娯楽業」、「サービス業」などの対人サービスなどに整理される。当然、いずれの産業にも高度な知的労働と定型的な労働は必要であるが、その必要度とその配分の状況が産業ごとに異なり、これが産業ごとの男女比や雇用形態の偏りとなって現われている。ポスト工業化は雇用構造のジェンダー化を招いている。

まず、女性比率の高い産業は非正規労働者が多く、賃金が低い（以下、図表1参照）。2012（平成24）年における全雇用者数に対する女性比率は全産業で42.8%であった。この平均を上回る産業は、女性比率の高さにしたがって、「医療、福祉」（女性比率77.1%、非正規雇用比率36.1%、現金給与総額295,425円、以下同じ）「宿泊業、飲食サービス業」（63.0%、70.9%、127,152円）、「生活関連サービス業、娯楽業」（58.2%、51.2%、219,454円）、「卸売業、小売業」（50.9%、46.5%、270,548円）である。これらの産業は「卸売業、小売業」を除きポスト工業化産業である。

図表1 産業大分類別・雇用形態別雇用者数、女性比率

	非農林業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	運輸・通信業	卸売・小売業、飲食店	金融・保険業、不動産業	サービス業	公務（他に分類されないもの）								
2002年																	
雇用者数	4907	421	1049		356	1093	152	1521									
構成比		8.6%	21.4%		7.3%	22.3%	3.1%	31.0%									
正規の職員・従業員	3471	353	839		280	595	124	1023									
非正規の職員・従業員	1436	68	210		76	498	28	498									
非正規比率	29.3%	16.2%	20.0%		21.3%	45.6%	18.4%	32.7%									
女性比率	40.5%	15.3%	32.4%	15.2%	19.6%	51.6%	48.2%	53.6%	21.7%								
	非農林業	建設業	製造業	電気・ガス・熱供給・水道業	情報通信業	運輸業、郵便業	卸売業、小売業	金融業、保険業	不動産業、物品賃貸業	学術研究、専門・技術サービス業	宿泊業、飲食サービス業	生活関連サービス業、娯楽業	教育、学習支援業	医療、福祉	複合サービス事業	サービス業（他に分類されないもの）	公務（他に分類されるものを除く）
2012年																	
雇用者数	5098	348	919	30	152	314	858	147	77	139	302	170	268	660	47	420	218
構成比		6.8%	18.0%	0.6%	3.0%	6.2%	16.8%	2.9%	1.5%	2.7%	5.9%	3.3%	5.3%	12.9%	0.9%	8.2%	4.3%
正規の職員・従業員	3309	286	721	27	129	228	460	118	49	112	88	84	177	422	35	178	177
非正規の職員・従業員	1789	62	198	3	22	86	399	29	28	27	214	87	92	238	13	242	41
非正規比率	35.1%	17.8%	21.5%	10.0%	14.5%	27.4%	46.5%	19.7%	36.4%	19.4%	70.9%	51.2%	34.3%	36.1%	27.7%	57.6%	18.8%
女性比率	42.8%	15.1%	28.8%	12.9%	25.6%	18.1%	50.9%	53.5%	35.7%	34.4%	63.0%	56.2%	53.6%	77.1%	40.4%	41.9%	24.1%
現金給与総額		365,413	372,073	545,164	481,478	335,546	270,548	461,383	340,138	442,407	127,152	219,454	387,120	295,425	356,451	252,500	

雇用者数、正規の職員・従業員、非正規の職員・従業員は総務省統計局『労働力調査年報』各年版「産業・従業上の地位・職業・年齢階級、配偶関係、世帯の種類、教育・従業者規模別就業数」による。
 雇用者数は役員を除く、当該年度平均であり、正規、非正規はそのうちの数。
 非正規比率は非農林雇用者数に対する比率。
 女性雇用者数、女性比率は総務省統計局『労働力調査』長期系列データより、2002年は第10回改定日本標準産業分類別雇用者数、2012年は第12回日本標準産業分類別雇用者数による。

ところが、女性比率の高いポスト工業化産業のなかでも、正規雇用比率も賃金も高い産業もある。「金融業・保険業」（53.5%、19.7%、461,383円）や「教育、学習支援業」（53.6%、34.3%、387,120円）である。学校教育には女性が多く雇用され、伝統的に男女同一労働同一賃金が実現している。「教育、学習支援業」はこれを含む分野であるが、全体としては女性管理職が全管理職の11%に過ぎない事実が示すように（総務省統計局「平成24年労働力調査年報」より算出）、これら二つの産業でも女性の多くは経営の下層に位置している。これはこの産業で働く多くの女性が相対的に低い賃金を余儀なくされていることを示している。

これに対して男性が多い産業は正規雇用比率が高く、賃金も高い。ここでは女性比率が低くなるにしたがって非正規雇用率も減少し、その逆に賃金水準が高くなっている。この産業は「電気・ガス・熱供給・水道業」（女性比率12.9%、非正規雇用比率10.0%、現金給与総額545,164円、以下同じ）、「情報通信業」（25.6%、14.5%、481,478円）「学術研究、専門・技術サービス」（34.4%、19.4%、442,407円）である。「電気・ガス・水道業」が地域独占に支えられた公共事業的な産業であるとしても、これ以外のポスト工業化産業とともに、これらは高度の人的投資に支えられた「格付けの高い」職種が多い産業なのである。

要するに、男性比率が高い産業は「格付けの高い」職種が多いため、正規雇用比率が高く、賃金水準は高い一方、女性比率が高い産業は定型的な仕事が多いため、非正規雇用比率が高く、賃

金水準が低い。つまり、ポスト工業化は雇用構造のジェンダー化とともに展開する。これをもたらしているのが仕事のジェンダー化である。女性比率も、非正規雇用率も高い産業の仕事は定型的な仕事が多く、家事労働の延長線上にあるとみなされる仕事が多いからである。

(2) 仕事のジェンダー化と低賃金

「宿泊業、飲食サービス業」、「生活関連サービス業、娯楽業」、「医療、福祉」などのポスト工業化産業と「卸売業、小売業」の仕事はケア（育児、介護）やホスピタリティ（親切なもてなし）など家事労働の延長線上にあるとみなされる。上野千鶴子は、ヴェロニカ・ビーティが周辺化されたパートタイム労働について『低賃金労働だから女が就いている』のではなく、『女向き』に作られているから低賃金になる」と論じたことを紹介し、ケア労働が安いのは『女の仕事』と考えられてきたから」（上野千鶴子、2011/13,158頁）だと主張する。

この指摘はケア労働に限らず、これらの産業の仕事が女性により担われる家事労働の延長線上にあると社会的にみなされれば、これらの仕事は誰にでもできる仕事であり、簡単な訓練で遂行できるため、低賃金でよいとされる。大沢真理は女性労働の賃金状況について性別役割分業論に基づき、男性は妻子を養うに足る生活費を稼がなければならないから、年齢につれて賃金を上げ、その賃金に見合う技能をつけさせる。これに対して女性の労働は家事が主であるため、女性の賃金は低くてよく、その賃金に見合う技能しか形成されず、低賃金となると論じた（大沢真理、1993）。つまり、ポスト工業化産業のうち低賃金産業分野の仕事は家事労働の延長線である誰にでもできる仕事であり、高い技能が形成されない定型的な仕事となるため、低賃金となる。したがって、これらの仕事を担う従業員は企業のコアな仕事を担う高賃金の正規従業員である必要はないため、低賃金の正規雇用か、非正規雇用で賄うのである。

たとえば、介護労働ではケアを担う仕事は資格を必要とせず、介護福祉士などは業務独占資格ではない。ここではこの無資格者をベースに最短で3週間（合計130時間の講義と演習）ほどで取得できる介護職員初任者研修（旧ホームヘルパー2級）、および介護福祉士へとつながる実務者研修そして介護福祉士というキャリアパスを描く。介護福祉士は、養成施設（2年以上）や福祉系高校出身者、実務経験に加えて実務者研修の修了者が国家試験を合格することによって取得できる。これらは2015（平成27）年から開始された新たな介護労働者のキャリアパスであるが、無資格でもケア労働に従事できる。彼らの賃金は基本的には公定価格である介護報酬の費用（人件費）として決定されるため、どの程度の賃金が介護労働に対する対価として社会的に妥当とみなされるかによって決定される。介護労働は、高い教育や訓練が必要ではなく、家事労働の延長線上であるとみなされる限り、低賃金にならざるを得ず、正規雇用である必要はない。これは介護労働に限ったことではなく、ポスト工業化産業に広くみられる現象なのである。

このように、労働市場の二極化は主には女性比率の高いポスト工業化産業において仕事がジェ

ンダー化していることにもよるが、工業化産業において正規労働が非正規労働に置き換えられているという側面も無視しえない⁷⁾。したがって、問題は、ポスト工業化と工業化産業に共通する雇用形態と仕事内容を決定する人事労務管理の方針すなわち役割業績主義の特徴である。これは、経営者がリストラクチャリングとリアンエンジニアリングの過程で日本的雇用慣行に代わる人事労務管理を成果主義や業績主義として模索し、ようやく2010年を前後して整理され、定着したのである。

Ⅲ 役割業績主義と格差の構造

(1) 役割業績主義と日本的経営の優位性

日本経団連は2010（平成22）年、1990年代の後半から企業を席卷した成果主義の問題点を以下のように指摘した（日本経団連、2010/11）。いずれの指摘も日本的経営がもたらした競争優位を損なうものであった。第一に、成果主義が成果を過度に重視した制度であったため、短期間で結果がでる、あるいは成果がでそうな簡単な仕事のみを目標に掲げる傾向が強まったことである。これは、日本的経営に特徴的であった仕事の面白さで動機づける内発的動機づけ（高橋伸夫、2010）の低下を示す。第二に、その結果、部下や後輩の育成は敬遠され、ジョブローテーションが避けられ、人事異動が硬直化した。これは職場仲間による教え合い、学び合いの機能と職務の柔軟性の基盤が崩れたことを示す。第三に、合理的、客観的な評価基準を整備しないまま、目標管理制度を取り入れた企業では、従業員の評価に対する納得感が低下し、評価に対する不信感が従業員のモチベーションを下げたことにある。これは経営に対する信頼感の低下である。最後に、これらのことからコミュニケーションが希薄となり、周囲との連係、意思疎通に支障をきたす問題が生じた。これはチームワークの瓦解とこれに基づくモラルの低下を示す。

要するに、成果主義は日本的経営の優位性を弱体化させた。教え合い、学び合いによる多能工の育成、これによる職務の柔軟性、革新性を育むチームワーク、これらを支える経営への信頼やモラルそして内発的モチベーションはすべて日本的経営の優位性を形成していたからである。これらと右肩上がりの成長は相互依存関係にあった（安田尚道、2006/12）。日本経団連の指摘は、右肩上がりの成長が終了した現在、日本的雇用慣行が現代的に再構築されなければならないことを示している。役割業績主義はこの課題を担ったのであった。

役割業績主義における役割とは市場の要求を戦略的にとらえ、これに基づき目標を設定し、この達成のための「期待される成果」のことをいい、役割等級はこれを階層化したものである。「期待される成果」である役割は具体的には職務や職責でとらえられる。ここにおける評価は「成果評価」と「コンピテンシー評価」からなる。前者は「期待される成果」（役割）を基準に仕事の実績を評価し、仕事を管理する機能を果たす。後者は役割と人＝能力を調整し、「期待される成果」

を上げるための「期待される行動」を基準に実際の行動を評価する人事管理機能なのである（石田光男、2006）⁸⁾。

ところで、成果主義の反省の上に立って日本的経営の優位性を再構築するためには、教え合い、学び合い、相互のコミュニケーションなどの協調性、高い目標設定などの積極性などが「コンピテンシー評価」の項目に示されなければならない。しかし、教え合い、学び合いなどのチームワークは、日本的経営で示された集団主義のような企業で形成される社会関係を基礎としているため、この評価は集団的に形成される態度と意欲を考課する「情意考課」に近くならざるを得ない。さらに、これらの行動により役割（「期待される成果」）を果たすためには企業においてこれらを達成する能力が形成されていなければならない。したがって、たとえば、多能工をもたらず技能度合や教え合い・学び合いにおける協調性やリーダーシップ、これらの結果形成される企業独自の職務知識や企画力などが能力として位置づけられる必要がある。これらの点に注目すれば、役割業績主義においても日本的雇用慣行と同様な職能形成が評価される。日本経団連は貢献度を職務遂行能力の発揮度で見ると、職能資格制度における範囲給を例として次のように説明する。「同じ職能資格等級に格付けられていても、初期のうちは格付け資格に該当する課業は少なく、職務遂行能力の伸びに応じて、課業配分もだんだん当該資格該当課業が増え、場合によっては上位資格に該当する課業も、上司の指導のもと与えられる」（日本経団連、2007。50頁）とし、職能は簡単な仕事から難しい仕事へとOJTにより形成されるように管理されているとしている。日本的雇用慣行時代の職能資格制度における仕事管理そのままである。

つまり、役割業績主義における人事考課は役割等級制度に基づく「成果考課」と「コンピテンシー考課」に加えて、これらの基となる能力を評価する「能力考課」の三つの要素から構成され、「コンピテンシー考課」は結局従来の「情意考課」に近似したものにならざるを得ない。実際、日本経団連では、役割業績主義における人事考課を保有能力と発揮能力から評価する「能力評価（考課）」、役割とその達成度から評価する「業績評価（考課）」、職務遂行過程での行動を評価する「行動評価（考課）」からなるとしている（カッコ内は筆者）（日本経団連、前掲書、108頁）⁹⁾。役割業績主義は職務遂行能力である職能そして職務と職位からなる役割により構成される。コンピテンシー考課は態度意欲考課（情意考課）に近似したものとして役割遂行過程あるいは職能発揮過程において考課されるのである。

（2）役割業績主義と雇用形態

従業員は二つの基準から構成される役割業績主義のもと四つの類型により処遇される。二つの基準とは、第一に、戦略上必要な役割を設定し、これを達成するための職務や職位の重要度や責任、困難度に応じて序列化された役割等級（図表2の縦軸）であり、第二に、この役割を達成するための多様な職務の塊を遂行できる職能の水準に応じて序列化された職能等級（図表2の横軸）

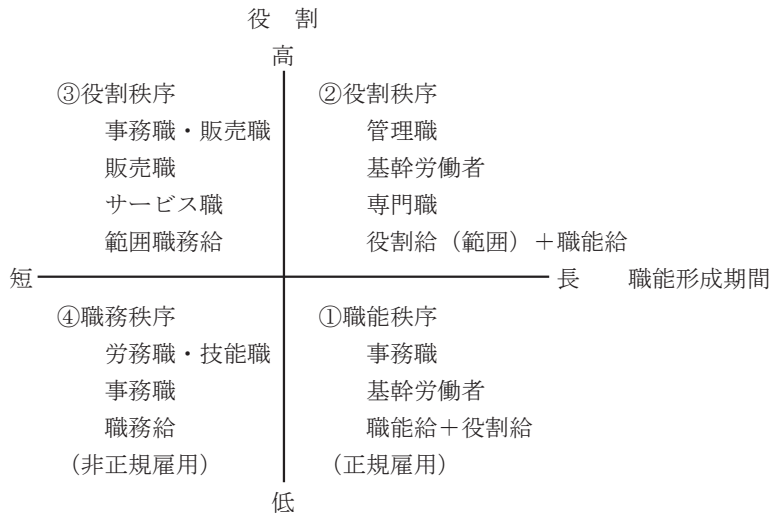
である。従業員はこの二つの基準により形成される四つの類型に分類され、秩序付けられ、考課されるのである。

第一の類型は、将来高い役割を担うための職能を長期的に形成する段階にあり、いまだ役割は低い従業員が位置づけられる（図表2の①）。ここでは従業員は職能形成が期待されるため、職場では職能秩序が形成され、人事考課は能力考課と情意考課が主となり、役割に基づく業績考課のウエイトは高くない。したがって、賃金も個人差が認められる範囲をもった職能給が中心となる。これに該当する雇用労働者は管理職前の事務職や熟練をめざす基幹的な技能労働者である。第二の類型は、長期間の職能形成ののちに、管理者や専門職そして基幹的な熟練労働者として高い役割を担うようになった従業員である（図表1の②）。彼らは役割により秩序付けられる。したがって、彼らは能力考課よりも役割に基づく業績考課が中心となり、これと部下を指導しながら、この業績を達成するためのコンピテンシーが加味された情意考課により考課される。彼らの賃金は役割給と目標管理によって定められた業績給が主となるのであった。これらの従業員は企業で長期間にわたって将来高い役割が担えるように管理されるコア従業員であり、正規従業員なのである。

第三の類型はこれらのコア従業員の周辺に位置し、職能形成期間が短く、そのために基本的には定型的な仕事を担うが、役割は高い従業員が位置づけられる（図表2の③）。役割が高いのは、たとえば小売業などの販売や介護などのように、彼らのサービス提供がサービスの質や売り上げや企業のイメージを形成するからである。彼らは役割秩序のもとで秩序付けられ、給料は職務給であるが、役割の達成状況により個人的な業績が加味される範囲職務給が主流となる。しかし、役割が高いとはいえ、ここでの職能形成期間は短く、定型的な仕事である。ここに位置づけられる従業員は販売職そしてサービス職などの非正規従業員である。第四の類型は、役割も低く、職能形成期間も短い非正規従業員である（図表2の④）。彼らは職能形成期間が短くてすむ単一の定型的な仕事に就き、職務秩序により秩序付けられる。したがって、賃金も単一職務給が多い。ここに位置づけられる従業員は非正規の技能職や労務職が主となるのであった。

このように、役割業績主義は従業員を役割と職能を基準として四つの類型に分類するが、これはまた賃金、配置、昇進、昇格ばかりでなく、雇用形態をも決定する。したがって、これはまたポスト工業化における格差発生メカニズムを総括的に表したものである。女性比率の高い、ケア（保育、介護）やホスピタリティ（販売、飲食店、宿泊業、生活サービス）のようなポスト工業化産業での仕事は家事労働の延長線上の能力であると社会的にみなされるため、企業での役割は高いが、職能形成期間が短い定型的な仕事であるため、低賃金であり、多くは非正規労働により担われる（図表の③）。この労働を担うものは家庭と仕事の両立が難しく、あるいは未熟練能力しか形成されない女性が多い。また、役割も低く、職能形成期間が短い仕事が多い工業化産業やポスト工業化産業では、定型的、従属的な仕事が多いため、製造派遣や事務派遣などの非正規労働者が多くなる（図表の④）。彼らは学歴レベルの低いあるいは未熟練な男女の労働者である。

図表2 職場秩序と雇用形態



これらの未熟練、非正規雇用、低学歴者は失業や貧困などの新たな社会的リスクを被る可能性が高いのである。

IV 雇用構造と新たな社会的リスク

P.グービー (Peter.Taylor-Gooby) によると、新たな社会的リスクとは、ポスト工業化社会へと移行した経済的、社会的変化の結果としてライフコースに直面したリスクのことであり、四つの変化が重要であるとする。第一の変化はポスト工業化社会への移行過程で多くの女性たちが支払い労働に移行したことであり、これには二つの駆動力があった。ひとつは十分な家族所得維持のための二人稼ぎの重要性であり、もう一つは、教育や自立した雇用を入手する際のより大きな均等への女性による要求であった。新たな社会的リスクは仕事と家庭の調和に最大の困難性を見出す平均より低い熟練しか身に付けていない女性に対して最も強く現れる。第二の変化は高齢化である。ますます増える老人介護や保育の責任の女性雇用への影響は家族の貧困リスクに影響する。貧困率は共働きより一人稼ぎ型の夫婦世帯の方が高い。第三の変化は、技術的發展と国をまたがる競争の強化による労働市場の変化が教育と雇用を密接な関係にしたことである。このことは水準の低い教育しか受けていない人々の社会的排除のリスクに影響する。大卒と比較すると、彼らは失業と長期的な貧困に陥りやすい。第四の変化は、古いリスクに対応する福祉国家への圧力をうまく処理するために政府支出を抑制する試みから生じた民間サービスの拡大にある。これは市民が消費者として不十分な選択をするとき、そして民間供給における標準の規制が有効でな

いときに社会的リスクを生み出す可能性がある (P.Taylor-Gooby, 2004, pp.2-4)。つまり、新たな社会的リスクにさらされている人々は仕事と家庭の調和の困難を抱える平均より低い熟練しか身に着けていない女性や一人稼ぎの夫婦世帯、低学歴の人々、そして福祉の民営化の中で不十分な選択をした消費者としての市民である。

日本においてもポスト工業化のなかで生じる新たな社会的リスクが発生している。確かに女性雇用労働者が年々増加しているが、前述したようにこれは均等への要求だけによるのではない。日本の雇用慣行に基づく「男性稼ぎ主」型の雇用に基づく生活パターンが崩れ、グービーが指摘するように、共働きが生活を維持するために必要となっているからでもある。しかし、日本では性別役割分業観が強いいため、女性の労働供給曲線がまだM字型カーブを描き、その底が上がってきたとしても、それは非正規労働者による。このなかで仕事と家庭の調和が難しく、平均より低い熟練しか身に着けず、学歴も低いひとり親の家庭は新たな社会的リスクに陥る可能性が高い (安田尚道/塚本成美, 2009)。最近の調査では学歴レベルにより失業の状況が相違すること (総務省統計局「学歴別、年齢別完全失業率」2014)、「社会福祉基礎構造改革」による民営化や市場化そして社会保険の改革が人々の生活の質に格差をもたらしていること (上野, 2011/13)、つまり、P.グービーが指摘する第三の問題、第四の問題も顕在化しているのである。

ところで、厚生労働省の「働く者の生活と社会のあり方に関する懇談会」(2006年)の報告によると、ポスト工業化社会は「豊かな社会のもとにおける多様な消費者ニーズを背景に、商品やサービスの質・付加価値が重視され、ヒトが『知恵』や『感性』を通じて、これをつくり出すことが経済活動に大きく寄与する」とされるとともに、格差が解消される社会であるともされた。その一方で、このような「次代の先端を担う人材は、量的に限られており、多くの人々を吸収し支える産業として、『思いやり』を大切にし、ヒトの面倒を見る対人サービス産業が重要な役割を担うことが期待される」とも指摘していた。

しかし、実際には多くの人々を吸収し支える産業は女性比率の高い、非正規中心の低賃金分野として形成された。ここでの仕事はケア (保育、介護) やホスピタリティ (親切なもてなし) など「思いやり」を大切にした社会的役割も、企業での役割も高い仕事であるが、職能形成期間が短く、家事労働の延長線上と社会的にみなされている仕事である。これに加えて、ポスト工業化により高度化された製造業などでも、定型的あるいは一時的な仕事が発生する。これらの産業に、未熟練、低学歴者、仕事と家庭の調和が困難な人が配置され、彼らはポスト工業化社会における新たな社会的リスクに陥る。格差社会はこのようなポスト工業化社会のもう一つの側面なのである。

おわりに

格差はポスト工業化の過程における雇用と仕事のジェンダー化のもと役割と職能を基軸とする役割業績主義により労働者が四つの類型に分類される構造のなかで生み出された。そのうち、家事労働の延長線上にあると社会的にみなされるケア（保育、介護）労働やホスピタリティ（飲食店・宿泊業、小売など）労働は役割が高いが、職業能力の形成期間の短い定型的な仕事に就くため、女性非正規労働により多く担われる。また、役割も職能形成も短い労働者は工業化産業を含めた非正規労働を担う。これらに位置づく労働者は仕事と家庭の調和が困難であり、平均より低い能力のままの女性労働者や低学歴の労働者であり、彼らは新たな社会的リスクに陥る可能性が高いのである。

このような格差発生構造のなかで新たな社会的リスクに陥りやすい労働者は生活と雇用の選択の幅が狭い、生活の質（QOL、Quality of Life）が低い人々である。実体的には、中学卒業の男女や高校卒業の女性労働者や大手製造業以外の企業に就職した男性、女性の労働者、高卒、大卒のフリーター、シングルマザーやシングルファザーがこの新たな社会的リスクに陥りやすい¹⁰⁾。問題はこれらの人々の生活の質を向上させていくために、個人の能力を向上させ、これが可能となる環境を整備していくことである¹¹⁾。たとえば、ケア労働に高い社会的評価を与え、高い能力が必要であることを示しながら、その能力が形成されるような社会的環境を構築することなのである。

- 1) たとえば、E.マッケンナとN.ビーチ（E.Mckenna/N.Beech,2002/08）は人的資源管理を体系的にまとめ、J.ストレイ（John Storey,1991/1999）などは人的資源管理の論点をまとめている。これらの中には、当然、労働組合との関係が論じられているが、労務問題として労働者の生活問題として論じているものではない。
- 2) 経済学ではたとえば橘木俊詔（1998）や大竹文雄（2004）などがあり、この論争を通じて所得格差が社会問題として認識されるようになった。また、社会学では山田昌弘（2004）や青木紀（2003）などが、社会政策論では大沢真理（2007）などの研究がある。なお、本稿におけるQOLは、アマルティア・センの議論に従い、ひとが「選択する機会をもった可能性の問題」（A.Sen,1985、邦訳、91頁）であるとし、ひとが様々な生活をおくるための選択可能性の状況のことをいう。
- 3) かつて隅谷三喜男は「労働力の再生産＝労働者の消費生活の分析は労働経済の重要な一環となす」（隅谷三喜男、1976/79）とし、資本の再生産過程との関係を明らかにした。
- 4) 人事労務管理の対象、目的、主体については、森五郎と藻利重隆の人事労務管理研究と石坂巖の経営社会学的研究によっている。

- 5) この方向性を示したが日経連による「新時代の『日本的経営』」(1995)であった。
- 6) アンデルセンは、現在の家族を「ベッカー均衡」から「新しいジェンダー平等均衡」への過渡期にあると位置づける。前者は性別役割分業に基づく核家族により安定的な配偶関係が形成される家族であり、後者は能力形成に関心をよせ、自律的に生きようとする女性の生涯を通じた有償労働志向による男女の平等を図ろうとする家族である。問題はこの移行への過渡期において所得格差が生じている事実である。アンデルセンは「新しいジェンダー平等均衡」が高学歴、高所得層で進展し、低学歴、低所得層では性別役割分業観が根強く、「新しいジェンダー平等均衡」が「未完の革命」に終わっていると指摘する (Esping-Andersen,G 2009, 邦訳, pp.12-5)。
- 7) 玄田有史は、「パートとフルタイムの置き換え」論に対して実証的に批判し、「事業所レベルの雇用変動を見たとき、得てして多くの事業所の実体とかけ離れている」とし、問題は「パートとフルタイムの関係についての個別事業所の『特異性』であろう」(玄田有史, 2004) とする。本稿では主にはパートが増えたのは産業構造のポスト工業化によるものとしたが、工業化産業においてもパート比率が高まっていることも示している (図表1)。
- 8) そのほか、役割業績主義の研究は今野浩一郎 (2012) などが詳しい。
- 9) 人事考課の三つの側面については日本生産性本部代表経営コンサルタントである元井弘も、人事考課を目標管理と連動させた実績考課が中心となる「業績考課」、能力考課は設定しないものの、保有能力の発揮実績としての能力を評価する「業務推進考課」、目標達成プロセスにおける組織維持機能と業績向上機能にかかわる活動実績を評価する「意欲行動考課」と整理している (元井弘, 2009)。
- 10) 紙幅の関係からこの点については次の論文において報告する。
- 11) A.センはケイパビリティを「人の行うことができる様々な機能の組み合わせを表し」、このような「『潜在能力集合』はどのような生活を選択できるかという個人の『自由』を表している」(Sen,A,1992,邦訳,59-60頁) と指摘している。つまり、センは、潜在能力の状況が自らの生き方に基づく生活を選択できる自由を表すとしているが、個人を取り巻く環境もまたケイパビリティを形成する際の重要な要因であるとしている。センはこれらの「様々な価値ある機能を達成する人の能力は公共活動や公共政策によって高められる」(Sen,A,1990,p.31) としているからである。つまり、ケイパビリティは労働者固有の潜在能力だけでなく、公共活動や公共政策などからなる複合体なのである。

- 青木紀 (2003) (編) 『現代日本の「見えない貧困」』 明石書房
- Esping-Andersen, Gosta (2009), *The Incomplete Revolution*, Polity Press, Cambridge, 邦訳 『平等と効率の福祉革命』 (大沢真理監訳) 岩波書店、2011年)
- 玄田有史 (2004) 『ジョブクリエイション』 日本経済評論社
- 今野浩一郎 (2012) 『正社員消滅時代の人事改革』 日本経済新聞出版社
- 石田光男 (2006) 「賃金制度改革の着地点」 『日本労働研究雑誌』 No554
- 元井 弘 (2009) 『役割業績主義人事システム』 生産性出版。
- 日本経団連 (2010/11) 『役割・貢献度賃金』 日本経団連出版
- Mckenna, Eugene/Beech, Nic (2002/08), *Human Resource Management*, Pearson Education
- 森 五郎 (1966/74/86) 『労務管理論』 有斐閣双書
- 大沢真理 (1993) 『企業中心社会を超えて』 時事通信社
- (2007) 『現代日本の生活保障システム』 岩波書店
- 大竹文雄 (2004) 「所得格差の拡大は本当にあったのか」 樋口美雄/財務省財務総合政策研究所 (編) 『日本の所得格差と社会階層』 日本評論社
- Sen, Amartya (1985), *Commodities and Capability*, Elsevier Science Publisher B.V. 邦訳 『福祉の経済学』 (鈴木興太郎訳) 岩波書店、1988年
- (1990), *Capability and Well-being in The Quality of Life*, Clarendon Press, 邦訳 『不平等の再検討: 潜在能力と自由』 池本幸生/野上裕生/佐藤仁訳、1995/2005年)
- (1992), *Inequality Reexamined*, Oxford University Press
- 隅谷三喜男 (1976/79) 『労働経済学』 筑摩書房
- Storey, John (1991/99), *New Perspectives on Human Resource Management*, International Thomson business Press
- Taylor-Gooby, Peter (2004), *New Risks, New Welfare*, Oxford University Press
- 高橋伸夫 (2010) 『虚妄の成果主義』 ちくま文庫
- 橋本俊詔 (1998) 『日本の経済格差』 岩波新書
- 上野千鶴子 (2011/13) 『ケアの社会学』 太田出版
- 安田尚道 (2006/12) 『持続的発展の経営学』 唯学書房
- 安田尚道/塚本成美 (2009) 『社会的排除と企業の役割』 同友館
- 山田昌弘 (2004) 『希望格差社会』 筑摩書房

星野徹「イーデイス・シットウエル讃 * 「薔薇の詠唱」を中心として(2)」、『湾』第六七号(一九七九年)、八一―一頁。
 星野徹「イーデイス・シットウエル讃3 * その詩論の位相」、『湾』第六八号(一九八〇年)、十六―十八頁。

星野徹「イーデイス・シットウエル讃4 * 「朝の歌」から「薔薇の詠唱」へ」、『湾』第六九号(一九八一年)、十一―十七頁、二一頁。

星野徹「イーデイス・シットウエル覚え書 * 「アン・ブリンの歌」の周辺」、『湾』第七六号(一九八五年)、十四―十七頁。

星野徹「イーデイス・シットウエル詩集」、星野徹訳編『イーデイス・シットウエル詩集』(思潮社、一九九三年)、一六八―一八八頁。

星野徹『詩と神話』(思潮社、一九六五年)

星野徹『詩と原型』(思潮社、一九六七年)

星野徹『詩と発生』(思潮社、一九六九年)

星野徹『星野徹詩論集Ⅰ』(笠間書院、一九七五年)

星野徹『星野徹詩論集Ⅱ』(笠間書院、一九七五年)

星野徹『車輪と車軸』(沖積舎、一九八一年)

星野徹『Quo Vadis?』(思潮社、一九九〇年)

星野徹『星野徹全詩集』(沖積舎、一九九〇年)

星野徹訳編『イーデイス・シットウエル詩集』(思潮社、一九九三年)

星野徹『現代イギリス詩覚書』(沖積舎、一九九五年)

星野徹『星野徹の世界 神話的形而上詩』(沖積舎、一九九六年)

星野徹『ダンの流派と現代』(沖積舎、二〇〇〇年)

星野徹『薔薇水その他』(菅野弘久編)(国文社、二〇一四年)

*

菅野弘久「『薔薇水その他』の余白に」、星野徹『薔薇水その他』(菅

野弘久編)(国文社、二〇一四年)、四五―一四七八頁。
 菅野弘久「星野徹書誌目録(著書・評論・翻訳)」、星野徹『薔薇水その他』(菅野弘久編)(国文社、二〇一四年)、三九―四五〇頁。

菅野弘久「星野徹の未刊詩集『天の蠅』」、『常磐短期大学研究紀要』第四三号(二〇一五年)、三五―五八頁。

G・S・フレイザー「イギリスの現代詩」(中橋一夫訳)、『現代詩講座4 海外の詩』(創元社、一九五〇年)、七―二三頁。

中桐雅夫「炎と氷の詩人エデイス・シットウエル」『詩学』一九五〇年二月号(第五卷第二号)、九二―一〇〇頁。

中桐雅夫「エデイス・シットウエル」、『現代詩講座4 海外の詩』(創元社、一九五〇年)、二二―二四頁。

Bowra, C.M. *Edith Sitwell* (The Lyrebird Press, 1947)

Frazer, G.S. *The Modern Writer and His World* (Kenkyusha, 1951).

Sitwell, Edith. *Aspects of Modern Poetry* (Duckworth, 1934)

Spender, Stephen. *Poetry Since 1939* (The British Council, 1946)

ほくらが汚れた魚を葬るとき
たとへば

海に向ふから響いてくる

人類の墓地を用意するとき

人類の十字架に釘打つとき

あの不幸な槌音のためか

傘をつたひ柄をつたひ

指さきから絶え間なく

ほくの内部に流れこむ黒い滴りよ

すでに死が流れる僕の腸も

ひとつの川だ

友よ

過去が未来へと流れていくように

やがて死滅するだらう経験をあつめて

川

の流れこむ未来は何処か

〈心からくづれる一個の桃

腐つていく地球の巨大な核〉

(29) 星野徹「ひとつぶの麦」、『詩と発生』(思潮社、一九六九年)、

一一〇頁。

(30) 同右、一三二頁。

(31) 星野徹『現代イギリス詩覚書』(沖積舎、一九九五年)、九一十頁。

(32) 星野徹「剽窃の問題(下)」、『茨城歌人』一九五九年十月号、

二〇頁。また「容器についての補足的断想」(一九七〇)にも、
現代に生きる詩人(芸術家)ゆえの困難と孤独について、(神

の定義を中心としてそこから演繹的に生活様式や社会体制の
すべてが規定され、したがって一つの調和を保っていた時代、

芸術家にとっては幸福な時代がかつては存在したように思わ
れる。だがそのような調和の崩壊したはての現代にあつては、

芸術家のひとりびとりが、工人である前に先ず世界観、価値
観の創始者でなければならぬ。しかし、共通の理解、一致

の欠除の上に立つて創始される世界観、価値観が逆に共通の
理解、一致を獲得するということは奇蹟に近く、したがって

創始者ひとりびとりの内に固く閉ざされた孤独の体系となら
ざるをえない。芸術家を呑みこむディレンマがここにあるこ
とになる」とある。

参考文献

星野徹「イーデイス・シットウェル論 第三章ダグダリストから予
言者へ」、『紋章』第九号(一九五五年)、七十三頁。

星野徹「イーデイス・シットウェル論 第三章ダグダリストから予
言者へ」、『紋章』第十号(一九五五年)、一十四頁。

星野徹「E・シットウェルの詩」、『茨城歌人』第三号(一九五八年)、
三六頁。

星野徹「Edith Sitwell: Dark Song」『英語青年』一九七八年九月
号(第二四卷第六号)、一五九頁。

星野徹「イーデイス・シットウェル讃 * 「薔薇の詠唱」を中心
として(一)」、『湾』第六六号(一九七九年)、十二一十

三頁、十七頁。

James, *Edith Sitwell: The Symbolist Order* (Southern Illinois University Press, 1968), Pearson, John, *Facades: Edith, Osbert and Sacheverell Sitwell* (Macmillan, 1978), Salter, Elizabeth, *Edith Sitwell* (Jupiter Book, 1979), Elborn, Geoffrey, *Edith Sitwell: A Biography* (Doubleday, 1981), Glendinning, Victoria, *Edith Sitwell: A Lion among Unicorns* (George Weidenfeld & Nicolson, 1981), Cewasco, G.A., *The Sitwells: Edith, Osbert, and Sacheverell* (Twayne, 1987), *The Sitwells and the Arts of the 1920s and 1930s* (NPG, 1994), Richard Greene, *Edith Sitwell Avant-Garde Poet, English Genius* (Virago, 2011).

(26) 星野徹『車輪と車軸』(沖積舎、一九八一年)には、エリオットへの関心にふれて、〈わたしの関心の在りどころも、その詩や劇のシンボリズムの解明と言ったところから、詩人の生き方、そのモラルの面へとすこしづつ移行してきているようである。しかしこれは、分析批評から肖像批評への移行を必ずしも意味するものではない。わたしの願いは、強いて言うなら、肖像批評を抱えこむような形で分析批評を成立させることはできないか、ということであって、結局はエリオットをどう読むか、というところにそれは帰着する問題であろうからだ〉(二三四頁)という一文が見えるし、また『現代イギリス詩覚書』では、批評アプローチと関連する文体について、〈仮りに、作品の意味論的分析を通しての構造解明に終止するなら、それは作品論と呼べるものになるだろうし、他方、動機や発想にアプローチするなら伝記的事実の再組織の面から推理するほかなく、こちらの作業は詩人論ということになるだろう。わたしの文章には、前者の方法を主眼としながらも、それと対立するはずの後者の方法をも随時織りこん

でゆくといった、言わばアンビギュアスな性格があり、そこを勘案すれば覚書と呼ぶのがふさわしいかと思う〉(二九八頁)とも語る。

(27) 星野徹編訳『イーデイス・シットウェル詩集』(思潮社、一九九三年)、一七八―一八〇頁。

(28) 菅野弘久「星野徹の未刊詩集『天の蠅』」、『常磐短期大学研究紀要』第四三号(二〇一五年)、四二―四三頁。

黒く雨

雨の街路の

コウモリ傘の黒い流れ

かんまんに流れ光なく流れ

どの人も昨日の黒い幻影を背負つて

見ひらかれたどの瞳孔にも

六月の窓々をいろどる

いちりんの薔薇さへ映らない

友よ

死滅した経験をあつめて流れるもの

それがひとつの川であるなら

川は何処へ流れこむのか

雨の街路の

おお 何と言ふ黒い風景

なぜ

ぼくらは喪服を着けなければならぬのか

七五年)、三〇頁。

- (7) Sitwell, Edith, *Aspects of Modern Poetry* (Duckworth, 1934), p.228.
- (8) Bowra, *op.cit.*, p.20.
- (9) 星野徹「イーデイス・シットウェル論 第三章グダイストから予言者へ」、『紋章』第十号(一九五五年)、十三頁。
- (10) Bowra, *op.cit.*, pp.41-42.
- (11) 星野徹「渇水期」、『短歌十字路』一九五五年二月号。
- (12) 星野徹「イーデイス・シットウェル論 第三章グダイストから予言者へ」、『紋章』第十号(一九五五年)、十三頁。
- (13) 星野徹『現代イギリス詩覚書』(沖積舎、一九九五年)、二九九頁。
- (14) 星野徹「イーデイス・シットウェル論 第三章グダイストから予言者へ」、『紋章』第九号(一九五五年)、十一-十三頁。
- (15) 星野徹『星野徹全詩集』(沖積舎、一九九〇)、七〇一頁。
- (16) G・S・フレイザー「イギリスの現代詩」(中橋一夫訳)、『現代詩講座4 海外の詩』(創元社、一九五〇年)、七二-三三頁
- (17) Frazer, G.S., *The Modern Writer and His World* (Kenkyusha, 1951), pp.340-43.
- (18) Frazer, G.S., *op.cit.*, pp.413-14.
- (19) 星野徹「詩と神話」「詩と神話」(思潮社、一九六五年)、十一頁。
- (20) たとえば「詩と神話」では、ユング的な詩と神話の関係を積極的に取り入れたイギリス現代詩人が三類型に分けて説明されている。なおStephen Spender, *Poetry Since 1939* (The British Council, 1946) には、シットウェルにあてた一章のほかに、詩人が創作する際の諸条件を論じた章があり、そこでキャスリン・レイン、アン・リドラー、E・J・スコヴェルについての短い言及がある。レインについては、星野のエッセイで議論の傍証として、しばしば取り上げられるだけでなく、「キャスリン・レイン詩抄」と題した訳詩原稿も残っている(未公開)。リドラーとスコヴェルについては、『白亜紀』の目次カット代わりの短詩訳に取り上げられている。
- (21) 菅野弘久「『薔薇水その他』の余白に」、星野徹『薔薇水その他』(菅野弘久編)(国文社、二〇一四年)、四五-四七八頁。
- (22) 『星野徹全詩集』、五六九-六二三頁。『PERSONAE』以前一九五八年(一九六三年)には、(一九五八年)の『白亜紀』第七号から(一九六三年)の同誌第二一号に発表された詩篇のうち、『PERSONAE』に収められた「エホバ」(第十九号)をのぞく十四篇が含まれている。『白亜紀』の創刊が一九五七年だから、この分類は『白亜紀』初期の活動を映していることになる。『白亜紀』以前の創作活動については、主に『紋章』(一九五二-五六年)に発表された詩篇を集めた『天の蠍』からうかがえる。星野がその未刊詩集を編むのが、一九六三年ないし六四年であり、編集理由も、それまでの創作活動の総括にあったと推定されることから(拙論「星野徹の未刊詩集『天の蠍』」)、一九六四年が星野にとって大きな区切りの年であったことが理解できる。
- (23) 星野徹「棘の座標 わが志向」、『棘』第一号(一九六三年)、六頁。
- (24) 星野徹「詩の人生」、『星野徹の世界 神話的形而上詩』(沖積舎、一九九六年)、九六-九七頁。
- (25) シットウェルの没後、とくに重要な伝記および研究として、以下のようなものがある——Slater, Elizabeth, *The Last Years of a Rebel: A Memoir of Edith Sitwell* (Bodley Head, 1967), Lehmann, John, *A Nest of Tigers: Edith, Osbert, and Sacheverell Sitwell in their Times* (Macmillan, 1968), Brophy,

ということが ひとつの決意を呼びさます やはりほくは小鳥を飼おう

そして「ミソサザイ」は、第一詩集『PERSONAE』に収められるとき、巻末に〈跋〉として、その位置をあたえられることになる。

注

(1) 星野徹訳編『イーデイス・シットウエル詩集』(思潮社、一九九三年)、一六八―一八八頁。

このモダニズムを代表する女流詩人研究の〈第一世代〉で、もつとも早い時期に紹介しているのは、齋藤勇『思潮を中心とせる英文学史』(一九二七)である。齋藤はまた、福原麟太郎編 *Modern English Poems* (一九二九) にも短い解説を寄せている(『Sitwell 姉妹、その他』)。一九三〇年代に入ると、はやくも具体的な論考が現われてくる――井上思外雄『イーデイス・シットウエルの技巧に就いて』(『英文學研究』第十一卷、一九三二)、井上思外雄「イーデイス・シットウエルの『朝の歌』」(『青山文學』第三六号、一九三三)、加藤朝鳥「女詩人 Edith Sitwell」(『英語青年』第七二巻十号、一九三五)、寺西武夫「Sitwellism and the Wheels Group」北村常夫「Edith Sitwell of the Wooden Pegasus」(『英語青年』第七八巻五号、一九三五)、尾島庄太郎「イーデイス・シットウエル」(『英詩文叢』一九三五)など。一九三六年には「研究社現代英文學叢書」の一巻として、酒井善孝編 *Selected Poems of Edith Sitwell* が刊行された。

一九三〇年代に入ると翻訳による紹介が始まる。詩篇については、『制作地帯』第九号(一九三一)、『詩形式』第二号(一九三一)、『文学』第一冊(一九三二)、『権の木(三次)』第三号(一九三二)などで行われ、一九三四年には北村常夫による『田園喜劇』の翻訳がボン書店から出版されている。詩論やシットウエルに関する論考も、『現代英文学評論』(一九三〇)、『新領土』第一号(一九三七)および第十七号(一九三八)などで翻訳紹介されている。これが星野のいう〈シットウエル研究〉の〈第一世代〉の状況である。

戦後間もなく、中桐雅夫が「炎と氷の詩人エデイス・シットウエル」(『詩学』一九五〇年二月号)と「エデイス・シットウエル」(現代詩講座4 海外の詩、一九五〇)を発表し、『英語青年』誌上では、安藤一郎と高村勝治による合評が行われるが(『Edith Sitwell』――現代詩合評(第一〇〇巻一、一九五四)、シットウエルへの関心は急速に薄れ、限られた論考を数えるだけとなる。

二〇〇〇年代になると、再び翻訳が登場し(『凍る(ひ)』――イーデイス・シットウエル詩集(書肆山田、二〇一〇)、『惑星の蔓』――イーデイス・シットウエル詩集(書肆山田、二〇一一)、『ヴィクトリア』――英国女王伝(書肆山田、二〇一五)、論考も少しずつ増えてきてはいるが、作品分析を重視した全体的な再評価が今後の大きな課題である。

- (2) 星野徹『現代イギリス詩覚書』(沖積舎、一九九五年)、二九八頁。
- (3) 星野徹『ダンの流派と現代』(沖積舎、二〇〇〇年)、三〇〇頁。
- (4) 星野徹『閨歴』『Quo Vadis?』(思潮社、一九九〇年)。
- (5) Bowra, C.M. *Edith Sitwell* (The Lyrebird Press, 1947).
- (6) 星野徹『原型的イメジ』『星野徹詩論集I』(笠間書院、一九

理学、フレイザーやハリスンの人類学、リチャーズの意味の分析、エリオットの詩論の一部、折口信夫や柳田国男の民俗学や古典解釈などを手掛かりにしながら模索してきたが、結果は、ポドキンの場合とかなり近いものになるらしいことを知った。²⁹⁾

さらに「わたしの詩論・一つのポイント」(一九六七)では、この発言が敷衍されて、〈原型的イメジ論〉の直接の契機がエリオットの『荒地』にあり、現代と文化人類学が明らかにする神話的世界との逆説的な相似性への驚きがあったことが語られるが、そもそも神話的なものへの関心を開いたことでは、シットウェルが果たした役割はやはり大きい。右の引用に続けて、星野はそのエッセイを次のように結んでいる――

先ず、詩は、もつともすぐれた言葉のもつともすぐれた結合でなければならぬ。そして、なおかつ、そのような言葉の結合が、つまり、結合の仕方、形式から生じるシンボリズムが、もつともプリミティヴな体験のパターンを抱えこむとき、つまりそのパターンを再生産しえたとき、言語の形式美は格段と時空の奥行きを増すに違いない。そのような言語の形式美は、一面、人間の知的な美感に訴えながらも、それだけに留まらず、その美感を通してそのパターンに照応する人間のもつとも奥深い情動的な部分をも、衝きかきかすに違いない。そのとき、すぐれた詩が偉大な詩となる。³⁰⁾

神話批評の構築のために集中して詩論を書き、そして思考して得た詩への確信は、諸学の知が星野の裡で融解して再構成された結

果ではあるにせよ、〈言葉のもつともすぐれた結合〉による〈形式美〉が〈もつともプリミティヴな体験のパターン〉と結びつくときに、〈偉大な詩〉が生れるとする主張は、前衛詩人から予言者となつたシットウェルの姿が意識されていたように思われる。

さらにもうひとつ、星野がシットウェルから得たことは、その孤高への意志ではなかつたろうか。それは精神の高貴性といいかえてもよい。シットウェルが黙殺され続けた理由のひとつに、文学的立場を異にするものへの激しい攻撃的姿勢があつたことは認めた上で、それでもなお自分の信じる美的価値を主張するために、〈これほど単独性に徹した生き方というものはむしろ壮絶に映るのではないか。巫女的な奇矯さ、というよりも、自己の信念に対するよほど誠実な性格、その持ち主でなくては、このような生き方は不可能であろう〉という評価を星野は示す。³¹⁾ 詩人の個のありかたについて、星野はかなり早い時期から意識していたようで、〈詩的神話〉の可能性を模索していた同じ時期に、スペンダーの『創造的要素』――シットウェル論が掲載された直後の『紋章』十一号と十二号(一九五五)に、星野による抄訳がある――の〈単独者たる作家の夢〉にふれながら、作品の永遠性を得るために不可避な〈一つの瞬間性のユニークな認識〉へ到る、〈作家の孤絶の意識〉について論じたエッセイがある。³²⁾ 星野の孤高への意志は、詩人としての大きな転換期に書かれた「ミソサザイ」に感じ取れる。その末尾は、こう刻まれている――

いま 明るい疎林をくぐりぬけ 茨のあいだをすりぬけながら
 しいだいにほくを 迷宮の深みへといざなう ミソサザイ
 よ 枯葉色のちいさな欺瞞と不遜よ ここまでできてしまった
 ぼくには 戻ることも往くことも同じだから 同じだから

雨の街路の

おお 何と言ふ黒い風景

なぜ

ほくらは喪服を着けなければならぬのか

ほくらが汚れた魚を葬るとき

たとへば

海に向ふから響いてくる

人類の墓地を用意するとき

人類の十字架に釘打つごとき

あの不幸な槌音のためか

ここには、「なおも雨は降る」冒頭部分への明らかなアリュージョンがある——

なおも雨は降る——

人間の世界のように暗く、わたしたちの喪失のように黒く——

千九百と四十本の釘のように盲目に

十字架の上に。

なおも雨は降る

無縁墓地で槌打つひびきに変る心臓の鼓動のような音を

ともない、墓を踏み荒らす不信人な者のような

音をともなうて。

〈人類の墓地〉、〈人類の十字架に釘打つ〉、〈不幸な槌音〉だけではなく、標題「黒い雨」も、すでに冒頭部分から触発されている

ことがわかる。〈六月〉の〈雨の街路〉に続く〈コウモリ傘の黒い流れ〉、その〈昨日の黒い幻影を背負つて〉虚ろに進む人々の〈流れ〉は、〈喪服〉をまとうて進む葬列のようでもあり、そのとき詩人も〈死滅した経験〉と〈やがて死滅するだろう経験〉が流れる〈川〉、みずからの裡に〈すでに死が流れる〉〈ひとつの川〉と化す。そして詩人は、その〈川〉の〈流れこむ未来〉である〈海〉を予見できずにいる。逆に〈海に向ふから響いてくる〉〈不幸な槌音〉。それは、いまなお世界のどこかで続く戦いに響く〈あるいは記憶の底に消えずに残る〉銃声であり爆音であるうか。詩人の息苦しいほどの閉塞感または鬱の気分を映す〈黒い風景〉は、シットウエルのえがく戦時の風景、〈夜と暁〉の空が爆弾の〈雨〉で黒く染まるさまと不気味に重なり合う。

シットウエルのもっとも大きな影響ということでは、これまで見てきたように、戦争体験による絶望的な喪失感を癒し、不条理な現実とは対極にあるはずの世界へ、その〈詩的神話〉の可能性をもって、星野の目を開かせたことであろう。戦後間もなく短歌に手をそめ、『古事記』や『万葉集』を手がかりに記紀歌謡風のスタイルで詩を書き始めていることから、敗戦後の裡なる空洞を埋めるために、現実から遠いところにあるという意味で、星野には神話的なものを受け入れる素地が潜在的にあったともいえるが、それを決定的にしたのが、シットウエルとその周辺の詩人たちであった。

独自の神話批評が構築されていく過程について星野は、「ひとつぶの麦」(二九六四)のなかで、次のように語っている——

実はわたしは、ボドキンを知る以前において、詩の原理論として原型的イメージ論なる構想を抱き、フロイドやユングの心

し、一例としてあげる「なおも雨は降る」を、シットウェルが人類に手渡した〈悲劇に堪えるための命綱〉と評した。²⁷⁾ ドイツ空軍が落とす爆弾の〈雨〉——標題に沿えた詞書（一九四〇年の空襲、夜と暁）から連想される——が、〈十字架上に懸けられた飢えた人（キリスト）の〈脇腹から〉流れる〈血〉と同一化し、その〈血〉をもって〈キリスト〉が、〈自害した者〉——〈理解力を持たぬ悲しい闇〉にすぎぬ人間が起こした蛮行の結果——から〈罅られ咬まれる熊〉、〈盲目の熊〉までの〈あらゆる傷〉と〈狩り出された兎の涙〉をつつむ姿、すなわち爆弾の〈雨〉を神からの試練ととらえ、その試練に耐える〈キリスト〉の姿を想像し得たときに、この悲劇的現実からの救いを確信できることをシットウェルは語る。

その確信を導く〈雨〉と〈血〉の同一化は、〈なおも雨は降る〉と〈なおも血が降る〉との、文字数を切りつめたタイポロジカルな対照性（並置）によって印象づけられる。〈なおも血が降る〉の〈血〉と〈降る〉の連辞的關係は、日本語でもやはり不安定で、原詩に忠実であることで浮かび上がる異様な風景に、爆弾の〈雨〉によって傷つき、命を落としたロンドン市民の〈血〉のおびただしさも感じられる。また第五連で、〈見よ、キリストの血 天界に流れるさまを〉というように、〈血〉と〈流れる〉の自然な連辞的關係が確保されることで、〈降る〉に含意される下降の動きが弱まるだけでなく、逆に〈天界に〉と結びついて〈血〉の上昇する動きが感じられるとすれば、〈血が降る〉には、人類に等しく注がれるキリストの贖罪の〈血〉もすでに含意されるかもしれない。読者の読みを拡げる訳詞は、一切の説明を加えずに、日本語に移したことばのみによって原詩の価値を語る作業であり、星野はその創作にも等しい作業を通して、シットウェルの詩的世界

を明らかにする。

*

シットウェルが星野にあたえた影響のひとつとして、直接的な創作面でのそれということでは、たとえば歌集『夏物語』（二九六〇）の巻頭部分に置かれた忘れがたい一首がある——

人型の影灼きつけて白き壁わが民族の楯とも思ふ

ここには、「薔薇の詠唱」への意識があったと思われる——

歌声は絶えた 閃光の中で……。彼女の姿はどこにあるか？
溶けたのだ、消えたのだ——

彼女の赤い影だけが記憶をもたぬ石に焼きついて。

歌集のなかで「夏物語」の標題でまとめられている十九首には、生活詠にまじり、同じく原爆投下の記憶をとどめる（ヒロシマの記憶泡立つ耳のそこ蟬百万のかなでる挽歌）や、〈紛れなくあれはひぐらし薄明のもののみが持つ透明な声〉、〈啼き澄める蟬は蟬なりみづからのための鎮魂歌わが綴るべし〉のように、戦争（原爆）の記憶から生と死の意味を静かに自問する歌もふくまれる。「夏物語」には、星野にとつての〈夏〉——死者を想う季節——の〈物語〉、その両義の意味が浮かぶ。

もうひとつ、未刊詩集『天の蠍』に収められている、初期の作品「黒い雨」²⁸⁾の中間部——

いいかえれば、そのような議論を可能にするだけの、詩人・批評家としての星野の円熟を醸成する時間が、やはり必要であったということになる。その意味で、「イーディス・シットウエル覚書」を含む訳詩についても、詩人でなければまずできない仕事であった。

*

訳詩もまた批評と同義であると考えられるのは、原詩を意味論的に近い(と思われる)日本語に移す段階で、すでに分析的・解積的判断があり、最終的には一挙全体的にしか得られない詩の感動を、語義的正確さのもとより、論理的に説明されるべき釈義を、原詩の詩句や詩行から逸脱することなく、むしろそこに含意される感情の論理とでもいべきものにしたがって、ことばを選んでいかねばならないからである。

星野の訳詩の特徴——『ダン詩集』(一九六八)と『アンドルー・マーヴェル詩集』(一九八九)にも通じる——は、そのような困難なアプローチを前提にしながら、その上で最後は、日本語の詩として成立することをめざしている点にある。詩句の語順を可能なかぎり崩さないことで、原詩のイメージの有機的な連鎖を確保し、そのなかで開かれる読者の想像力を極力妨げないようにする。そのため、統語的に読めることを優先して説明的になるのではなく、むしろゆるやかな統語関係となることばの配置を選び、ことばとことばの間を活かして、読者の想像力が自在に広がるよう工夫する。また、あたえられる日本語も、訳者の解釈や評価を不用意に押しつけぬよう、相対的に色合いの薄い、端正で整った印象のことばが意識的に選ばれているように思われる——

なおも雨は降る——
 なおも血が降る 飢えた人の傷ついた脇腹から、
 彼はその心臓にあらゆる傷を堪える、——消滅した光の、
 自害した者の心臓の最後のかすかな閃光の傷、
 理解力をもたぬ悲しい闇の傷、
 罅られ咬まれる熊——
 番人たちにその無防備な肉を打たれて泣く
 盲目の熊の傷を……狩り出された兎の涙を。

Still falls the Rain——
 Still falls the Blood from the Starved Man's wounded Side:
 He bears in His Heart all wounds,——those of the Light
 that died.
 The last faint spark
 In the self-murdered heart, the wounds of the sad
 uncomprehending dark.
 The wounds of the baited bear, ——
 The blind and weeping bear whom the keepers beat
 On his helpless flesh ... the tears of the hunted hare.

「なおも雨は降る」の第四連。第二次世界大戦を契機に、シットウエルの詩風は大きく一変する。星野はその変化を、へかつて抽象詩の実験に没頭した前衛詩人とは打って違って、戦争という悲劇的現実を神からの試練として背負って立つ『旧約』の予言者的な風貌を、同時にそのような現実を汎人類的なアレゴリーへと昇華させる新しい時代の神話作者的な風貌を纏っていた」と説明

ば、シットウエルを論じる星野の姿勢や意識に変化があらわれるのも、ある意味当然であったといえる。

最初『湾』に発表された五つの論考は、『現代イギリス詩覚書』（二九九五）へ再録される際に、「薔薇の詠唱」を中心として、「詩論の位相」、「きぬぎぬの歌」から「薔薇の詠唱」へを小見出しとする（イーデイス・シットウエル讚）と（アン・ブリンの歌）の周辺）に再編され、そこに編訳書の「イーデイス・シットウエル覚書」を並置するという構成になっている。それにより、まず詩篇「薔薇の詠唱」の衝撃を詳細な作品分析を通して語り、次にそれを可能にする詩論を検証し、初期の実験的試みが前提となつて形而上的空間が現出する過程をたどる。「アン・ブリンの歌」に関する論考を格上げした格好の配列は、星野にとつてとくに重要な詩篇であつたことをうかがわせる。

「薔薇の詠唱」を中心としてでは、「薔薇の詠唱」の冒頭の〈薔薇は叫ぶ〉——シットウエルがフランス象徴詩の詩法をもとに開発した技法による——に注目し、〈薔薇〉をめぐるヨーロッパの伝統や神話的象徴的観点から、そこに対照的なエロスとアガペーの要素をふくむアンビヴァレンスを検出し、最終連に再び〈薔薇〉があらわれるまでの詩句の対立相補的な陰翳をすくいとすることで、〈対立相補の二元論が超越的な一元論へと止揚される〉構造をふくむ作品であることが論証される。

続く〈詩論の位相〉では、「薔薇の詠唱」に悲劇的な輝きと豊かさを実現している理由として、シットウエルに〈詩の言葉はそれ自体が一つの〈実体〉でなければならぬとする自覚〉があり、そこから〈実体としての言葉 詩の肉体としての言葉の組織〉を考へていたことが、『現代詩の諸相』や『アレグザンダー・ポープ』を傍証に説明される。〈人間の機能の内でもっとも原始的本能

的なもの〉に立脚するその詩論は、〈文明批評〉の様相も見せるが、〈彼女のそれはイデオロギーではなくて感覚であり、それも外界の事物と密着するときに生じる肌の、皮膚の感覚、男性よりも女性の方が生得的により多く備えていると想定されている感覚である〉ことも確認される。

「きぬぎぬの歌」から「薔薇の詠唱」へでの議論は、〈言葉の実体感の獲得〉をめざすシットウエルが、約十年の中断をはさんで詩作を再開したときの変化に集中する。〈人類の悲劇にかかわるところの多分に原型的な神話的な主題を追求する〉ようになるが、それは〈他者の苦痛への共感、また苦痛への自己同一化の能力が並外れていた〉からであり、その〈並外れた共感の能力〉によって、戦争の惨禍、とくに〈原子爆弾の投下〉を契機に、シットウエルは〈自己同一化のための最大の対象〉を見出し、そこに〈全身的な自己投企をはかる〉ようになったと説明される。

「アン・ブリンの歌」の周辺）では、「アン・ブリンの歌」が、星野にとつてすぐれて魅力的である理由が、詳細な作品分析を通して語られる。作品に取り込まれた〈実に多様な幾つもの神話的人物像〉が次々に変化して〈二つの対立的な系列〉を作り、それらが最後に同一化することによって、〈二元論的な世界像の、その対立と和解の相の現を、汎人類的な原体験の情緒的表出の形で、つまり一つの神話創造の形で達成していることを物語っている〉からだという。

これらの論考を通じて星野は、イメージの有機的な連鎖を慎重に跡づける作品分析によって、シットウエルの詩的世界（と同時に星野にとつての、この女流詩人の魅力と価値）を明らかにする。その議論の高い密度は、限られた研究資料を咀嚼して論旨に溶け込ませることを主とした『紋章』の論考には見られないもので、

知される追放または放浪のモチーフには、めざす場所さえわからぬまま、何かに駆り立てられて進んでいくような切迫感もあり、エリオットが「詩の三つの声」でいう〈第三の声〉ばかりでなく、星野自身の〈第二の声〉ともなっており、その心象風景を讀者に垣間見せる。

さらに一九六五年二月発行の『白亜紀』第二四号には「ペルセフォネ」が続くことになるが、これらの作品と並行して、重要な原型的イメジ論のひとつである「ヴァイタルな風」が、三回に分けて書かれていることにも注目したい。星野はその冒頭部分で、〈詩人は必ず批評家にならなければならない〉というボードレールのことばと〈詩人は理性を失う前にはうたえないのだ〉というプラトンのことばを引用しながら、詩を書くときの詩人の精神性、その相反する方向におもむく心理的態度について説明する——創作にあたっての詩人の意識的・自覚的な面、その個としての主体性を監視または検閲する〈批評家〉と、詩人が生きる生活共同体の集合的体験を代弁して伝える〈巫女〉が詩人の裡に不可分に共存する。対立的な〈批評家〉と〈巫女〉の相剋を乗り越えるときに、詩人としての精神が成立するなら、その詩人の想像力から生まれるイメジは、〈詩人の意識の深層から想起された集合的記憶、原体験とでも言うべきものの反映を帯びながら、その個性的なヴァリエーションとして定着されたもの〉であり、したがって、〈詩を書くことは、詩人の個性から超個性的な原型へ、その想像されたリアリティへと架橋することである〉。

この詩人のアンビヴァレントな心性についての洞察は、星野自身の創作時の内的変化を客体化した結果得られたものと考えられる。そうであれば、一九六四年が星野にとっての〈驚異の年〉²⁵であり、〈批評家〉と〈巫女〉が共存する理想的な詩人の姿が、星

野の裡で結ばれつつあったことをうかがわせる。星野は「ミソサザイ」に、〈このほくでさえ、うかつに忘れてしまいそうな、つまりはくいにいちばん近い、つまりはく自身のからだのどこか〉に〈ミソサザイ〉を飼い、その〈欺瞞と不遜〉が〈落日の中へ、ほくの悲哀が沈むとき〉に羽搏いて〈うたを取りもどす〉瞬間を待つと刻んでいるが、この〈ミソサザイ〉とは、意識の底にひそむ原体験であり、また理想とする詩人の精神性を形象化したものであっただろう。

*

星野の批評史におけるシットウエル論の不在が、シットウエルの示した〈詩的神話〉の可能性をさぐる時期にあたり、独自の神話批評の確立と、それにもとづく実作のために必要不可欠な時間であったとすれば、『湾』で展開される作品分析に力点を置いた一連の論考は、星野が詩人としての原点を再確認するための作業であったとも考えられる。むしろそこには、一九六四年にシットウエルが亡くなってから、シットウエルの攻撃的な反論を気にせず、研究者の学問的良心による冷静な議論と判断が可能となりつつある状況の変化もあつたはずだが、²⁶しかし批評原理との相互規定的な関係による、作品の意味論的／構造的分析を主としたアプローチから、作品の構造分析に主眼をおきながらも、そこに対立的な伝記的要素の再構成を必要に応じて取り込むというアプローチへの変化が見られるのも一九八〇年前後であり、²⁷また確立したスタイルで書かれた『PERSONAE』とその後の数冊の詩集とは違って、それまで禁欲的に抑えてきた主観的要素をふくむ詩集『落毛鈔』が編まれたのが一九八五年であったことを考えれ

シットウェルへの短い言及のある「詩と神話」(一九六〇)、「ペルセウスの盾」(一九六〇)、「卵の座標」(一九六三)、「薔薇園について」(一九六五)などをはじめ、初期詩論三部作——『詩と神話』(一九六五)、『詩の原型』(一九六七)、『詩の発生』(一九六九)——を構成する重要なエッセイがこの時期に集中して書きつがれていく。それらによって星野の神話批評が明確な姿をあらわすのは、海外詩を吸収するなかで得た方法論を短歌批評に援用した一九五〇年代、その後半から六〇年代前半のことであり、とくに「隠喩の時代」(一九五九)から「神々の砦」(一九六〇)を経て、「古代エスプリ」(一九六一)に到る短歌論には、その過程がはっきりと見える。²¹⁾

一方、実作の面で〈詩的神話〉があらわれるのは一九六四年前後と考えられるが、この判断の根拠は、『星野徹全詩集』での〈PERSONAE以前一九五八年～一九六三年〉という分類にある。²²⁾ 実際、一九六三年に星野は、前衛短歌を指向した『棘』の創刊に関わり(一九六九年、第九号で終刊)、創刊号に「繭」と題する十首とともに、次のことばを寄せている——

靈魂とその容器にかかわる原始的思考に、興味をひかれ始めたのは、いつごろからであつたらうか。そのような思考、そこから生まれる原型的イメージ、それらを中心として詩論のようなものも書いてみた。蓑虫考(無限四)、火の繭(現代詩手帖三七年・三月)、卵の座標(同三八年・八月)などがある。だが、それらの論を実作に応用することにおいては、正直なところ、はなはだ非力で、未だ着手していない。いや、現代詩の作品として多少こころみではいるが、成功というのにはほど遠い。理論と実作の懸隔を埋めてゆくことが、

もし今後も、私の力に余ることであるなら、いさぎよく、実作から袂別しなければならぬと思う。この繭一連は、私の決意のごときものを、幾らかかけてみた。²³⁾

そして翌一九六四年五月発行の『白亜紀』第二二号には「ミンサザイ」が、また同年八月発行の第二三号には「スサノオ」が登場する——

どこから どこへ 追われつづけるのか おれ いつから
いつまで 狩られつづけるのか おれ 獣のように 風のように
だが 風はなかった 束の間の停止 車輪の停止 烙印のように
そこに 貼られ 呪縛されて そこに おれが
在った 動けば 麦が切れる くいこむ

死体には 乳房がなかった 臍も 陰さえも それら 嬉々として
在った部分に 根が からみ もつれ もつれる細い
虹のように かがやいていた それら おれを愛した部分から
穂が いっせいに のびあがり のびあがる翠の蠟燭のように
夜空を指して 炎えていた

「スサノオ」は、星野が〈神話批評を創作面に応用した最初の試み〉であり、²⁴⁾『古事記』と『金枝篇』を想像の契機とし、さらにアイスキュロスの三部作にえがかれるオレステスを重ねながら、ペルソナとしての〈スサノオ〉を造型し、その劇的独白によってユングの原型をつかみとろうとする。(どこから どこへ 追われつづけるのか おれ いつから いつまで 狩られつづけるのか おれ 獣のように 風のように)の〈スサノオ〉の独白に感

初期の作品とは対照的に後期の作品、その〈紋章のような神話的世界〉に認められるのは、キリスト教信仰と自然の生命のリズムの名をもって、現代を支配する機械的な破壊力に抗議の意志を示すことであるという指摘は興味深い。¹⁷⁾

一九三〇年代の詩風に対する反動としての超現実主義にふれた説明で、次の箇所は、とくに強い印象を星野にあたえたと思われる――

In recent years, Freud has become a much less popular psychologist in England than his rival, Jung, who thinks that much dream imagery, and much traditional poetic imagery, does not represent so much the suppressed desires of the individual as a kind of latent race memory in the individual: in some obscure way we each of us recapitulate in the sunken depths of our mind the whole history of the race, and that explains the almost universal validity of certain images, which Jung calls archetypal images, and in particular it explains the effectiveness in poetry of mythological imagery long after we have ceased consciously to believe in myths. The poetic use of images in Jung's sense takes the poet back to a sort of symbolism, though no longer the enclosed and purely literary symbolism of Mallarme: the symbol is now the way of expressing certain universal emotions and aspirations which cannot be expressed in any other way.¹⁸⁾

「イーデイス・シットウェル論」では、この一節の要約が引用さ

れて、ユングの集合的無意識に関する部分（傍線部、菅野）は、このことはユングが原型的イメジと呼んでいる或る種のイメジの普遍的妥当性を説明する。殊に、久しく吾々が意識的に神話を信じなくなつてから、詩に用ひられた神話的イメジの効果を説明する）とある。（久しく吾々が意識的に神話を信じなくなつてから）の一行は、星野の第一詩論集『詩と神話』の巻頭に掲げられた、あの記念碑的エッセイ「詩と神話」の冒頭部分をただちに想起させる――〈私たちが神話というものを信じなくなつてからすでに久しう〉。¹⁹⁾

『現代作家とその世界』と、さらに「イーデイス・シットウェル論」でも参考になっているスペンダーの『一九三九年以後の英詩』*Poetry Since 1939*によつて、星野は詩と神話の関係を深める現代詩人の地勢図を得て、〈詩的神話〉または神話的想像力の可能性を実感していったと考えられる。星野が進むべき詩的方位を暗示するその微かな光は、続いて一九五〇年代後半にT・S・エリオットに出会い、その『荒地』からJ・G・フレイザーの『金枝篇』が視野に入り、そこからさらに文化人類学や民俗学へと関心が拡がるなかで、独自の神話批評を構築する道をはつきりと照らすことになる。そのすべての始まりが、シットウェルをめぐる現代詩の理解にあつた。

*

このような文脈に星野のシットウェル批評をおいてみると、『紋章』から『澗』までの約二五年間に、まとまったシットウェル論が書かれていないこと、その空白期間というのは、星野自身による〈詩的神話〉創造への滑走に必要な時間であつたともいえる。

世界を日本語訳と原詩をならべて紹介する。中桐自身の意見で構成されたというより、シットウェルをめぐる海外の動向を要領よく紹介しているという印象が残るが（実際、中桐は一九四八年十一月号の『詩学』（第三卷九号）掲載の「現代英詩の動向——新ロマンティズムへの道」でも、シットウェルをふくむ海外詩の動向を紹介している）、シットウェルの存在を強く印象づけた意義はやはり大きい。星野のその後の創作と批評の展開を考えると、中桐が言及するミューアの〈輝かしき超自然の慈悲〉や〈形而上学的な恐怖〉、あるいはレアマンの〈真の象徴の世界をつくり、人類に新しい神話を発見してやる責任は詩人の肩にかかっている〉、あるいは〈新しい象徴のみが、あるいは新しい象徴の組み合わせのみが、理解と驚異のショックをわれわれに与へ、われわれの理解力を完全にとらへて、それを芸術活動に向はすことができる〉という言述が、星野の意識をどのようにすりぬけたのか想像してみたい。『イーデイス・シットウェル論』で星野は、中桐の「アン・ボレインの歌」の部分訳を補いながら、不毛な現代におけるシットウェル、その神話的想像力の可能性について、次のような判断を下す——

人類が今日ほど宗教の力をもとめながら、今日ほど宗教の無力である時代はない。アーベルとカインの争闘は目につき、文明と言ふ怪物の横行さる世界は、永遠に不毛な寒冷の土地と化しつつある。こうした時代にあつて、イーデイスの詩的神話がどれほどの力と意義を有するかについて粗忽な判断は慎重まねばならないけれど、また決して詩は宗教や神学或ひは哲学などの代換物ではないけれど、それは確に情緒的な「慰撫」以上のものであるのかも知れない。「アン・ボレインの歌」に

はこの詩的神話に対する彼女の理念が見事に結晶されている。¹⁴⁾

中桐のエッセイに加え、同じく『現代詩講座4 海外の詩』に収めてあるG・S・フレイザーの「イギリスの現代詩」もまた、星野の詩学を考える上で重要な意味をもつ。フレイザーは英国文化使節として一九五〇年初頭に来日し、同年四月から東京大学で十二回にわたり現代英文学に関する講義を行う。その講義をもとに一九五一年、『現代作家とその世界』*The Modern Writer and His World*が研究社から出版されるが、この本から星野は、「シットウェルの〈神話的空間に示唆を得る〉ことなる」¹⁵⁾

「イギリスの現代詩」のなかでフレイザーは、イギリス現代詩の発展過程を一九一〇年から四〇年まで、十年単位で三つの主要な時期にわけて概括し、とくに一九四〇年からの十年間については、戦後の若い詩人たちに対して、〈旧詩人達（ロバート・グレイヴス、エドウィン・ミューア、イーデイス・シットウェル、キャスリン・レイン）にあつては、古代神話と、社会的個人的生活からみたその現代的宗教的意義に関心の向けられた時期〉にあると説明する。シットウェルについては、初期の詩の眩むような技巧的表現の下には〈深い孤独と悲哀〉の感情があふれ、後期の詩は〈深い道徳的恐怖が宗教的信仰によって変化させられた如き幻想である〉との判断を下す。¹⁶⁾

『現代作家とその世界』は、一八九〇年以降のイギリスの小説、戯曲、詩の展開を、現代性と関連づけて論じたものであり、詩については、第二次世界大戦後までを射程に収めている。具体的に多くの作品を引用して、バランスよく目配りの利いた説明を進めていく点に特徴がある。シットウェルについては、概念ではなく感情とイメージャリーによって世界と向き合い、技法に力点をおく

Whatever wounds mankind may inflict upon itself, whatever it may suffer from decay and destitution, it can in the end be healed by finding itself in harmony with the powers of nature and with the light and the love that inform them. This is Miss Sitwell's answer to the dark questions by the war.⁽²⁾

に全面的に依拠しているが、たとえは〈吸殻を棄て去るごとく過ぎてきぬ青春と言ふ実感さらになく〉⁽¹⁾の一首にじむ虚無感につつまれながら、戦争によって縫いようもなく引き裂かれた人生の前にして、星野もまた〈戦争と言う悲劇から投げかけられた暗い質問〉への〈解答〉を探さなければならず、そのなかで、ひとつの〈解答〉の可能性をシットウエルに見出そうとしたと考えられる。右の引用に続く部分には、こうある――

勿論彼女はかつての道化師から予言者になった。これは確かである。けれどそれと同時に、純粹詩の使徒から悲劇詩人となり、ジャズと立体絵画のアルチザンから神話の創造者となり、貴族的ダダイストから人類の受難者とさえなった。そして更にそれら彼女の変貌と発展とを可能ならしめたところの情緒的な靈感と音楽的絵画的想像力とはいうまでもなくそれらを作品の上に於いて豊かな輝きをもった音とイミジャアリの内に結晶させ得たところの、永年にわたる実験と練磨による技法の習得、そして彼女のイミジャアリの高貴性が追求している歴史的な背景と教養、こうしたものを吾々は改めて見直すべきではなからうか。⁽²⁾

戦争の惨禍を経験して〈悲劇詩人〉、〈神話の創造者〉となり、ついにには〈人類の受難者〉となったシットウエルに、現代に生きる詩人のあるべき姿を、そして〈情緒的な靈感と音楽的絵画的想像力〉を可能にする〈永年にわたる実験と練磨による技法〉と〈イミジャアリの高貴性〉に、あるべき詩の形を見たのではないだろうか。そして、その予感、後の形而上詩の追求にもつながっていく。星野が詩について考えるときに、自身の戦争体験が、星野の詩の通奏低音でもある〈ベシミズムの克服〉に関わるものとしても、重要な評価の座標軸になっていることは、「死者との付合いの歌」(一九六五)、「呪歌としての短歌をこそ」(一九六六)、「死者との連帯の風土」(一九七二)、「会田綱雄と敗戦の契機」(一九七四)、「吉岡実の不条理のアイロニー」(一九七四)などのエッセイからもうかがえる。

*

シットウエルの特異な詩的世界へ導かれる契機に、中桐雅夫の「エデイス・シットウエル——緑の歌他——」があったことを星野は明らかにしている。⁽³⁾このエッセイは一九五〇年十一月に創元社から刊行された『現代詩講座4 海外の詩』に収められているが、中桐は同年二月号の『詩学』(第五卷第二号)でも、「炎と氷の詩人エデイス・シットウエル」と題してシットウエルを論じている。両者の内容はほぼ同じであることから、『現代詩講座』の刊行に合わせてるように、『詩学』掲載の論考が少し修正されて発表されたと考えられる。

中桐の論考は、ステイーヴン・スペンダー、エドウィン・ミューア、ジョン・レアマンの見解を引きながら、シットウエルの詩的

が『紋章』に掲載された「イーデイス・シットウェル論」である。副題に〈第三章 ダグイストから予言者へ〉とあるのがその理由だが、エッセイ掲載前後の号にシットウェルの論考がないこと、「年譜」に〈パウラの単行評論『イーデイス・シットウェル』を唯一の手掛かりに〉読んでいったとあるように、「イーデイス・シットウェル論」のとくに前半部に、パウラを読み込んだ箇所が散見されること、また掲載号が卒業論文の提出から三年ほどしか経過していないことなどから、卒業論文の〈第三章〉を加筆修正して掲載されたものと判断できる。なお『紋章』は、一九五二年五月に『青銅』の名称で発行されたが、すでに同名の詩誌が存在していたため、同年七月発行の第三号から『紋章』に変更された経緯がある。その表紙に掲げられた“Poetry and Criticism”の英文表記は、シットウェルが一九二五年にホーガスプレスから出した詩論 *Poetry and Criticism* と同じであり、シットウェルを意識した結果ではないかと思われる。〈詩〉と〈批評〉を結びつけて考えていく姿勢は、詩誌『白亜紀』（一九五七）の一貫した志向につながっていく。

*

「イーデイス・シットウェル論」は、その副題〈ダグイストから予言者へ〉が示すように、シットウェルについての一般的评价の共通理解にそって、初期の純粹詩の創造を意図した前衛詩人から、中期の散文時代を経たのち、戦禍による人類の悲劇の代弁者に変っていく姿を説明する。『茨城歌人』に掲載された「E・シットウェルの詩」も同趣旨であり、その点で両者において、とくに新しい主張がなされているわけではないが、詩人星野の誕生を

促す関心のありかを知る上で、有意義な論考であることはあらためて確認しておいてよい。

『紋章』第九号に掲載された前半部分では、初期の〈画期的な実験〉による〈危険な改革者〉から戦後の〈英文学に於ける船首像の一つ〉としての地位を占める過程が、パウラも引用している「眠れる美姫」“The Sleeping Beauty”と「黄金海岸の風習」“Gold Coast Customs”に加え、「なおも雨は降り落ちる」“Still Falls the Rain”と「アン・ボレインの歌」“Anne Boleyn's Song”に言及しながら、またそこにローレンス・ダレル、G・S・フレイザー、ステイヴン・スペンダーの見解を適宜組み入れて、丁寧に語られる。第十号の後半部分では、引き続き「アン・ボレインの歌」を取り上げ、そこに「カインの影」“The Shadow of Cain”と「果して幾つの天が」“How Many Heavens…”を引用しながら、〈ダグイスト〉から〈予言者〉へと変貌するシットウェルを描いていく。その軌跡を辿るなかで導かれるものは、星野がシットウェルに引かれた理由の一端を明かしてくれるはずだが、それは次の一節に集約される――

結局、戦争と言う悲劇から投げかけられた暗い質問に対する、シットウェル女史の解答はこれである。すなはち、現在人類が如何に傷手を被つていようとも、如何なる頹廢と困苦に悩もうとも、啓示されたる自然の力と叡智と愛情との調和の中に自らを置くことによつて、遂には治癒され得ると言うことである。⁹⁾

この部分は、パウラの見解――

葉は物にさわられるか」(一九七六)において、再びシットウェルを引用しながら論じられることになるが、『詩と神話』(一九六五)の「あとがき」には、「A君、宇宙空間が、ぼくらの意識が、大きな速度で拡散しつつあるとき、それを収斂する核を、どこに求めればよいのでしょうか。つまり、人間の精神とは何ででしょうか。このふしぎなシンボル群、シンボル群を統一する原理とは、一体」とあり、ことばとモノとの関係を問うこの潜在的意識は、創作と批評の実践を重ねるなかで、つまりは詩の根柢をたえず問い続けるなかで徐々に明らかになっていく。これは星野の詩人としての自己規定を理解する上で見逃すことができない。人間の操るシンボル、その無限級数的な連鎖による体系化の結果、文明が築きあげられてきたことは認めながらも、その抽象化が極点に達した感のある現代においては、そのシンボルの体系を一度破棄して、ことばとモノとの原初的な関係をあらためて問い直さなければならず、そしてその困難作業を進んで担うのが詩人である、と星野は考えていたからである——(現代において、物を把握しなおし、人間と物との関係を把握しなおすことは、特に詩人に課せられた苦痛な使命であると思われる)。⁶⁾

星野がこのような認識に至る背景には、現代は氷河期以降、最大の変動の時代であり、機械が人間と触覚との間に割り込んで、人間から手触りの感覚を剥奪している、というシットウェルの現状認識があったことは想像に難くない。また星野のこの認識は、「文学は今何をすべきか」(一九八三)や「詩の土壤豊かな茨城」(一九八九)で示される、移植可能な〈文明〉に対する地域性に根ざした〈文化〉、つまりは〈コンクリート〉や〈アスファルト〉ではなく〈土壌〉との関係にいつそのの価値をおく思想とも通底する。この点については、シットウェルが回復をめざす〈視覚的

感受性〉を現代詩が著しく欠いてしまった原因として、パウラがあげている以下の諸点は、星野の志向に何がしかの影響をあたえたかもしれない——

Perhaps it comes because poets live now in towns and miss that variety of light and shade, of colour and outline, which countryside provides; perhaps it is due to over-intellectualisation, to a concentration on thought apart from things; perhaps it comes simply from a weakening of physical sensibilities in the stress and clamour of modern life.⁷⁾

星野は「前登志夫の原時間」(一九六五)のなかで、前登志夫の『子午線の繭』に〈直接体験の領域内にある具体物から、或る感覚のみを抽象し、同時に、抽象された感覚を類推の糸に通して連結し、かくして反現実の抽象の心象を紡ぐという手法〉があることを明らかにし、その上で〈時間のはるか彼方、意識のはるか僻縁から、無数の祖霊の苦悩と叫喚を充分に呼び出すことのできる歌〉と評価したが、この〈手法〉は他ならぬ星野自身のものでもあり、〈具体物〉の〈直接体験〉から得た〈感覚〉に〈類推の糸〉を通すこととで〈反現実〉へ到達すること、すなわちことばとモノとの原初的な関係によって、現実と測りあえる仮象の世界をつくること、が、詩人として星野がめざしたものであった。実在と仮象を可逆的關係で結ぶことばを探すというヘラクレスの苦行に、人間存在の栄光があると感じさせたのが、星野にとってのシットウェルではなかったらうか。

卒業論文についての推測を許してくれる、もうひとつの資料

髪の若者」「鳥の歌」(第十九号、一九六三)がある。『湾』に発表された一連の論考と「イーデイス・シットウエル覚書」は、『現代イギリス詩覚書』(一九九五)に再録されている。

『星野徹全詩集』(一九九〇)巻末の「年譜」では、(一九五一年)のところに「神田の古書店で、イーデイス・シットウエル『コレクタッド・ポエムズ』、メグローズ『シットウエル姉妹』を買った」とあり、また別のところで古書店での購入の記憶について述べている内容から、星野とシットウエルとの接点³が、直接には卒業論文の準備にあったことがわかる。さらに「年譜」には、古書購入の〈動機〉が「イーデイスの『原子時代の三部作』の衝撃」にあったとも記されているので、シットウエルの作品そのものに強く引かれた様子もうかがわせる。これは詩、とくに同時代の詩人による作品への星野の感受性の強さを示している。『原子時代の三部作』が広島の原爆投下に取材したものであれば、戦後まだ数年も経ない時期に遭遇した詩に、星野が自身の戦争体験を重ねて、戦争による癒しがたい喪失感や虚無感——〈壊滅したわたしの／ロマンティズム〉⁴——を感じていたことは容易に想像できる。

星野が提出した卒業論文——『イーデイス・シットウエル研究』——の所在について、「遺族と茨城大学附属図書館および教育学部英文学教室に尋ねたところ、その確認は得られなかったが、『Edith Sitwell: Dark Song』から、執筆時にどのような点に関心があったのか、その一部を推測することはできる。星野は、自身にとつて記憶に残る大切な詩、すなわち〈アンソロジー・ピース〉を語るといふリレー・エッセイのなかで、卒業論文にふれながら、その内容はすっかり忘れてしまったものの、「暗い歌」の“The brown bear rambles in his chan”だけが不思議に記憶に残っていて、その原因は“dr”や“mbi”の子音共鳴の効果にあり、また

それらが動物の毛皮の感じや手触りを再現している、という趣旨の発言をしている。詩句の母音や子音の共鳴と音価、さらにそれらを効果的にするアクセントやリズムの多様性など、シットウエルの初期の作品群に顕著な点については、パウラがそのシットウエル論でページを割いて詳説していることや、シットウエル自身が詩集『薔薇の詠唱』*The Canticle of the Rose*に付した「自作詩篇についての覚書」“Some notes on my own poetry”などによって理解をふかめていったと考えられる。作品を成立させる技巧に関心が向いているということは、その後の星野の文学営為を考えるとき、この段階ではふたつの意味で注目すべき点である。

ひとつは、作品の価値を判断するための技術と分析についての意識が見られるということ、これはニュークリティシズムの方法論とも関連する、詩を構造的な自律した客体として捉える姿勢に通じ、また創作へ向かう態度——読者の想像力を押し拡げる潜在的可能性を持ち、同時に精緻な分析に耐え得る作品の創造——を方向づけることにもなる。シットウエルの実験的技巧への試みへの意識は、最初期の歌論にもその影響が見られる。「余韻と韻律との関係について」(一九五二)では、〈余韻と言ふ心理的效果をもたらず修辭的技巧〉である〈韻律〉や、マラルメが〈その特殊な詩法「交感」において色彩感覚を母音で表そうとしたこと〉を引用しながら〈母音交響〉の効果を検討して、〈短歌のように極めて限定された小詩型においてはそれがシュールであれ何であれ音律と絶縁しては、その存在意義までも失ふことになるのではなかろうかと思ふ〉と主張する。

もうひとつは、ことばが感覚(触感)を呼び覚ます力、すなわちことばによるモノとの触知可能な関係をもとめる意識が、このときすでに芽生えていたと思わせる点である。その意識は後に「言

星野徹のイーデイス・シットウエル批評

菅野弘久

星野徹は、『イーデイス・シットウエル詩集』（一九九三）に収めた「イーデイス・シットウエル覚書」のなかで、日本におけるシットウエル受容にふれて、「日本でのイーデイス・シットウエル研究」の（わたしは第二世代に属するはずだが、第二世代と呼べるほどのものはないに出現しなかった）と述べるとともに、欧米の批評動向に連動して注目され続けたT・S・エリオットとは対照的な、戦後の黙殺ともいえる扱われかたについては、「この詩人の読者はこちらでは皆無に近い。このままでよいわけではない」とも述べる。^①星野の文章に親しいものには例外的とも映る、この強い調子のことばの意味するものは何か。いいかえれば、それだけ強い思い入れのある詩人イーデイス・シットウエルとは、星野にとってどのような存在であったのか。（半ば悲憤を覚えながら自ら機会を見つけて）書かれたという、そのシットウエル論を通して、この点について考えることが本稿の課題となる。

*

短く言及する程度ではなく、シットウエルを中心に論じたエッセイとしては、詩誌『紋章』の第九号と第十号に掲載された「イ

ーデイス・シットウエル論」（一九五五）と歌誌『茨城歌人』第三号に発表された「E・シットウエルの詩」（一九五八）、そして『英語青年』第一二四卷第六号所収の「Edith Sitwell: Dark Song」（一九七八）と詩誌『湾』第六六号から第六九号にかけて行われた論考——「イーデイス・シットウエル讃＊」「薔薇の詠唱」を中心として（①）（一九七九）、「イーデイス・シットウエル讃＊」「薔薇の詠唱」を中心として（②）（一九七九）、「イーデイス・シットウエル讃3 ＊その詩論の位相」（一九八〇）、「イーデイス・シットウエル讃4 ＊「朝の歌」から「薔薇の詠唱」へ」（一九八一）、「イーデイス・シットウエル覚書 ＊「アン・プリンの歌」の周辺」（一九八五）——がある。その他に、『イーデイス・シットウエル詩集』の解題「イーデイス・シットウエル覚書」もあげられる。訳詩については、『イーデイス・シットウエル詩集』以前に、『白亜紀』に発表された「歌」（第七号、一九五八）、「二つの声の歌」（第十七号、一九六二）、「薔薇の頌歌」「蝶日和」「おまえ若い虹」「金

二〇一五年十一月三十日受付

KANNO Hirohisa キャリア教養学科・教授（イギリス文学）

保育所におけるトイレ環境のあり方が 保育や子どもの発達に与える影響について

村上八千世*、寺田 清美**

1. はじめに

保育学の分野ではトイレや排泄をキーワードとした研究はあるものの、トイレトレーニングの時期や、排泄の自立の時期について言及したもの^{1) 2)}に留まり、トイレの配置と保育方法の関係のようにトイレ環境が保育に及ぼす影響を言及している研究はほとんどない。しかし子どもの主体性を活かした生活を支援していこうとすると、建築設備のあり方が大きく影響していることがよくわかる。特にトイレをはじめとする水まわり設備は保育の動線を強く規定し、その位置や造り方によっては、著しく保育をやりにくくしている場合がある。またこのような設備は一旦建築してしまうと、家具を動かすのとは訳が違い、容易に変更することが出来ないため、現場の保育士たちは使いづらいつらいと思いつながらしかたなく使っていたり、「こういうものだ」とあきらめてしまっているケースがほとんどである。保育所において子どもの「オムツ交換」、「トイレタイム」にかかる時間は決して短くはない。3歳以上になると排泄が自立し、頻度は比較的少なくなるものの、0、1歳児などでは、オムツ交換の回数も多く、一日の保育時間の三分の一以上の時間を費やしている場合もある。そして「オムツ交換」、「トイレタイム」は単に排泄の機会というだけでなく、保育者とのコミュニケーションの時間であり、子どもが主体的に生活できたことを自覚し自信をつける場でもあり、子どもの成長にとって重要な時間である。³⁾

トイレの配置や造り方によって保育そのものが規定されるにもかかわらず、その在り方については建築学でも保育学でも取り上げられることはほとんどない。多くの場合は園舎の設計は建築の専門家が行うが、保育や子どもの発達について理解できているとは限らず、古い設計資料集成を参考にして造られる場合も少なくない。保育者は空間が出来上がって使ってみてからでないと声を上げることは難しいが、その時は既に遅いという現状がある。

2. 目的

本研究は<調査Ⅰ>と<調査Ⅱ>で構成する。<調査Ⅰ>では保育所のトイレ環境の現状がどのような状態にあるのか、主に関東圏の保育所を対象に網羅的に調査した。<調査Ⅱ>では、乳

2015年12月1日受付

* MURAKAMI Yachiyo 幼児教育保育学科・特任准教授（幼児と環境）

** TERADA Kiyomi 東京成徳短期大学幼児教育科・教授（乳児保育）

児が使いやすいように、かつ保育者が保育をしやすいように検討してトイレ環境の改修を行った保育所を対象にピンポイント的に調査し、子どもがひとりでトイレに座れるようになる時期の変化を改修前後で比較した。これらの結果からトイレ環境のあり方が子どもの発達にどのような影響を与えている可能性があるのか考察することを目的としている。

3. 方法

<調査Ⅰ>

調査対象：主に関東圏の公立私立保育144箇所で行った。園の所在地、主体、運営クラスについては表1～3にまとめた。

調査時期：2007年7月に実施した。

調査内容及び調査方法：トイレの箇所数、トイレの配置などについては調査員が現地を視察した。オムツの種類、オムツの交換回数、1・2歳児のトイレ利用で保育者が大変に思うことについてはその園の保育士から聴き取った。なお調査員は保育士養成校の学生を起用し、各調査園につき1名であった。

<調査Ⅱ>

調査場所：A保育園1-2歳児用トイレ（1歳、2歳が使いやすいようにオープン式のトイレに改修した）。

調査方法：改修前のトイレ利用行動の様子を保育園の連絡帳および日誌の記述から、オマルの使用開始時期、トイレの使用開始時期を拾い出し、改修後の様子は保育士によりトイレ利用が可能になった月を記録してもらった。

調査時期：改修前は2004年4月1日～2005年3月30日、改修後は2006年4月3日～2007年3月9日であった。

調査対象児：1歳児クラスの乳児を対象とした。改修前は18人（男児5人、女児13人）で、平均月齢は19.4ヶ月であった。改修後は24人（男児13人、女児11人）で平均月齢は18.7ヶ月であった。なお平均月齢は4月時点のものであった。

4. <調査Ⅰ>の結果と考察

4-1. トイレの箇所数

園舎内のトイレの箇所数を園児数の規模に分けて分析したところ（表4）、50人以下の規模では2箇所、51～100人の規模では2～3箇所、101人～150人の規模では3箇所のトイレを設置し

表1 調査対象園の所在地

都道府県	園数
山形	1
東京	41
神奈川	3
埼玉	71
千葉	14
茨城	6
栃木	2
群馬	2
山梨	1
新潟	1
長野	1
岐阜	1
合計	144

表2 調査対象園の主体

	園数
私立	56
公立	88

表3 調査対象園の運営クラス

運営クラス	園数
0～5歳	111
0～4歳	1
1～5歳	28
2～5歳	1
0～2歳	2
1～2歳	1
合計	144

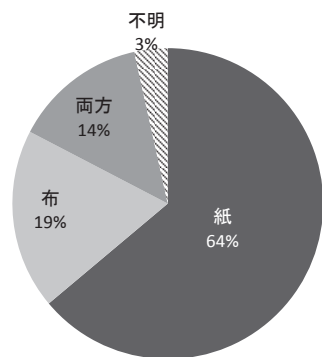
ているところが多かった。人数規模が少なくても2箇所以上のトイレを設けるのは乳児と幼児ではトイレ利用のしかたも変わるからであると考えられる。トイレの箇所数が1箇所の園は4園であったが、0歳児を保育していない園、または乳児のみを保育している園であった。

表4 園児数ごとのトイレの箇所数

園児数/トイレ箇所数	n	1箇所	2箇所	3箇所	4箇所	5箇所	6箇所	8箇所	(%)
50人以下	7	28.6	57.1	14.3					
51~100人	57	3.5	38.6	36.8	12.3	8.8			
101~150人	67		23.9	52.2	14.9	4.5	3.0	1.5	
151人以上	4			25.0		25.0	50.0		

4-2.使用オムツの種類

使用しているオムツの種類について調べた結果、紙オムツが6割以上、布オムツが2割弱であった(図1)。なお公立か私立の違いで特に差はなかった。



4-3.一人あたりのオムツ交換の回数

0歳と1歳について一日の一人あたりのおむつ交換の回数を保育士より聞き取り、図2にまとめた。なお、この回数は保育士が日常の経験から感覚的に回答したものであり、クラスの子ども全員分の回数を調査して平均値を出したのではない。

0歳も1歳も「4~5回」「6~7回」が多かった。0歳児では「3回以下」は少なく、8回以上の園が1割以上あった。逆に1歳児になると「3回以下」が増え、8回以上が減少する。0歳児も1歳児も4~7回とオムツ交換の回数が安定しているのは保育所では時間の目安を決めてオムツ交換を行っているためではないかと考えられる。またオムツの種類によって交換回数が極端に変わるということはなかった。

図1 使用しているオムツの種類と割合 (n=144)

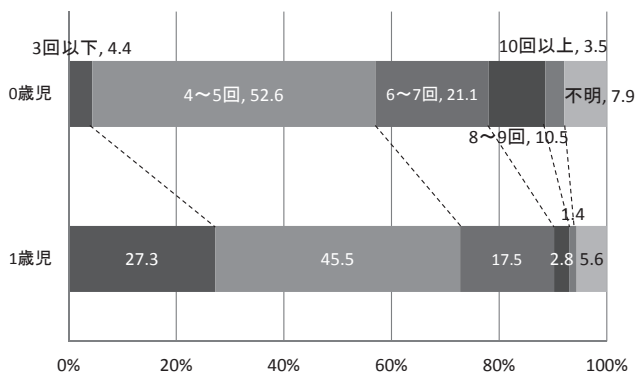


図2 0歳と1歳の一日の一人あたりのオムツ交換の回数

4-5.トイレの配置

トイレが保育室の中にあるかまたは直結してアクセスできるようになっているのか、保育室

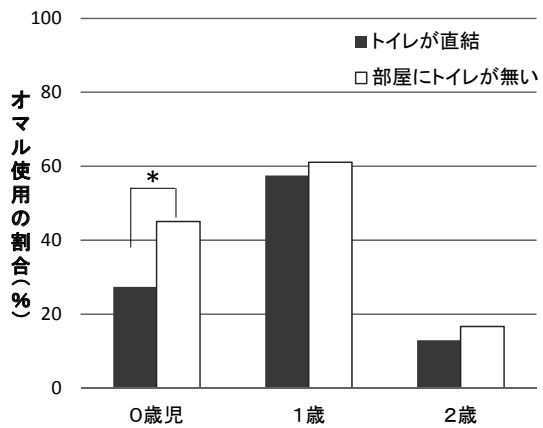
の中には無く廊下などを經由してアクセスしなければならないのかを調べて表5にまとめた。トイレが保育室の中にあるまたは保育室に直結している場合は0歳で54.4%、1歳は74.1%、2歳は53.5%、3歳は35.5%、4歳は27.0%、5歳は25.7%であった。1歳のトイレは保育室からアクセスしやすいように作られている場合が多くなっているが、0歳、2歳はトイレが直結しているケースは半分強に留まっている。2歳以下の場合には排泄の際には保育者が近くについている必要があることが多いが、保育室内にトイレが無ければ保育に支障が出る可能性が大きいと考えられる。3歳以上では保育室内にトイレが無いことが一般的になっているが、それは既に排泄が自立し、保育者がついていなくても自主的にトイレに行けるようになるためと、3歳以上の年齢の子どもでトイレを兼用することが建築的にも効率が良いために保育室の外に設置する場合が多いと考えられる。

4-6.トイレの配置によるオマル・トイレの使用状況

オマルは室内の都合の良い場所において使用することが出来、トイレが遠い場合やトイレの数が足りない場合にも大いに活躍している。これらのメリットがある一方で、その置き場所や使用後の始末などは煩雑で保育者の作業量を増やす要因ともなっている。図4にトイレの配置による0～2歳のオマルの使用状況についてそれぞれまとめた。0歳、1歳、2

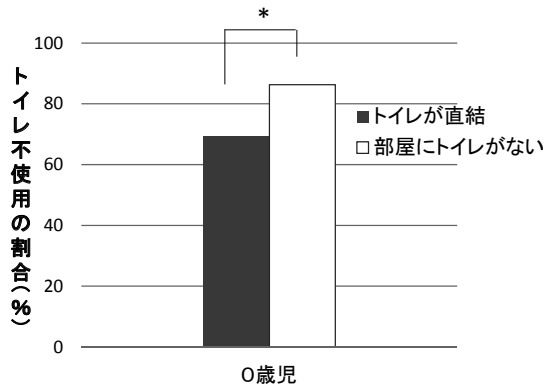
表5. トイレの配置

	n	トイレが直結	部屋にトイレがない	不明
0歳児	114	54.4	44.7	0.9
1歳児	143	74.1	25.2	0.7
2歳児	144	53.5	45.8	0.7
3歳児	141	35.5	63.8	0.7
4歳児	141	27.0	72.3	0.7
5歳児	140	25.7	73.6	0.7



* : p < 0.05

図4 トイレの配置によるオマルの使用状況



* : p < 0.05

図5 トイレの配置による0歳のトイレ不使用状況

歳ともにトイレが部屋と直結しているほうが部屋にトイレが無い場合よりもオマルを使用している割合が低い。またオマルの使用は0歳よりも1歳での使用が多く、2歳ではオマルの使用は一気に減少している。さらに0歳児のトイレ不使用の割合を見てみると（図5）、全体としてはトイレを使わない割合は高いが、部屋にトイレがない方がよりトイレを使わない割合が高いことがわかった。0歳はまだまだ歩行の発達も不完全であり、保育室からトイレが遠ければトイレを使えないことも納得できる。しかし、トイレが部屋と直結している場合もトイレを使わないのは、単に距離が近いというだけでは「使える」環境にはならないのかもしれない。

4.7. 1、2歳のトイレ利用で保育者が大変に思うこと

保育者が1歳、2歳の子どもがトイレを使用するとき大変に思うことを聴いてまとめた（図6）。一番多かったのは「タイミングを見計らって促すこと」であった。トイレに行くように呼びかけても素直に応じなかったり、嫌がって行かないなどトイレへ子どもたちを誘導することに手間がかかっていることがわかった。次に多いのは「順番調整、混雑する、数不足」で、トイレの中で子どもを並ばせたり、手際よく交替して使えるように調整したり、トイレタイムの混雑に対する大変さがわかる。次に「安全性」についてあげられている。トイレでは便器への移乗の際につかまるところが無かったり、トイレ用のスリッパに履き替えるときに転倒したり、扉の開閉で指を挟んだり、目が離せない状況にあることがわかる。保育者が「大変に思うこと」を見ていると、保育者主導で子どもをトイレに連れて行こうとしていることがよくわかる。大人の決めたタイミングでトイレに促し、一斉にトイレに連れて行き、並ばせて、いざこざが起きないように整理し、連れて帰ってくるというスタイルが前提になっていることが見て取れる。

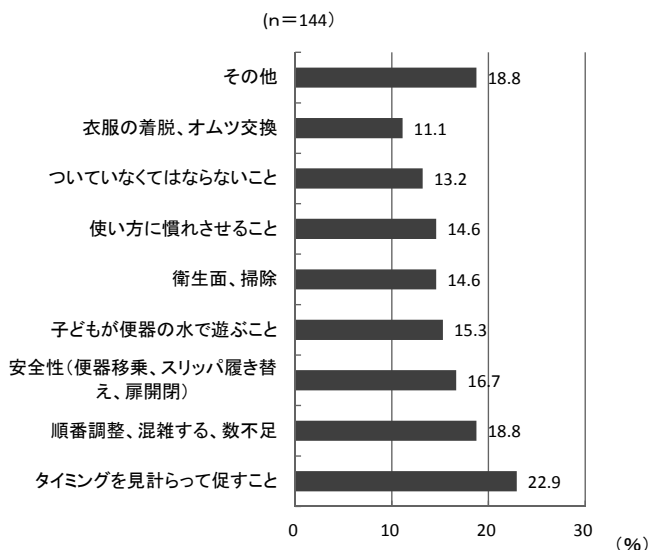


図6 1、2歳のトイレ利用で大変に思うこと

5. <調査Ⅱ>の結果と考察

A保育園では1歳、2歳が使用するトイレを図7のように、タイル式でスリッパに履き替えて使うタイプから木製フローリングの仕様に改修した。また保育室とトイレは壁で仕切るのではな



図7 A 保育園 トイレ環境の改修前後の比較写真

く、子どもがトイレの中にも保育室の様子が見えるようにスノコのようなパーティションで簡単に仕切った。その結果、保育者がトイレの中までついて入らなくても、子どもが主体的にトイレに行って帰ってこれるようになった。

表6. トイレ、オマルが利用可能となった平均月齢

		利用可能月齢	4月時点平均月齢
トイレ	改修前	24.6	19.4
	改修後	19.8	18.7
オマル	改修前	20.6	19.4

子どもがトイレ、またはオマルに一人で座れるようになった時期を調べたところ表6に示す結果が得られた。トイレ利用が可能になった平均月齢は改修前で24.6ヶ月、改修後は19.8ヶ月になり、改修後は約5ヶ月早くなった。

また、トイレに一人で座れるようになった人数割合の月推移をまとめて図8に示した。改修後は4月の時点で半数以上がトイレ利用が可能となっており、83.3%の子どもが6月中にトイレ利用が可能になった。改修後は最年少の13ヶ月齢児（4月時点）が4月にトイレ利用が可能になっているのに対し、改修前は同じく最年少の13ヶ月齢児（4月時点）は11月にならないとトイレ利

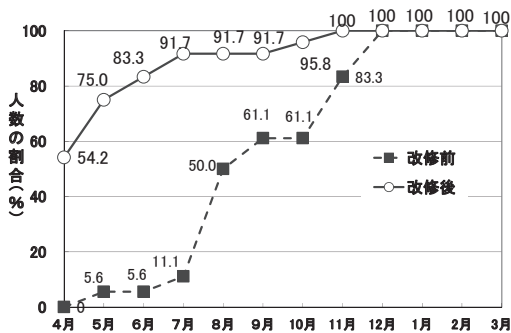


図8 1歳児のトイレ利用が可能となった人数割合の月推移

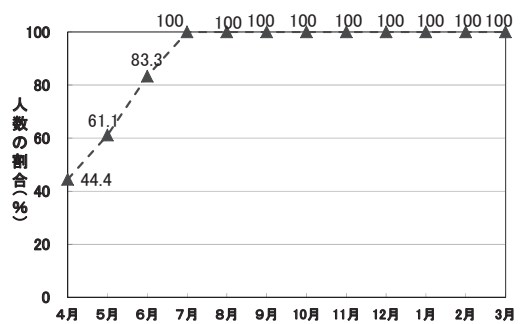


図9 1歳児のオマルの使用が可能となった人数割合の月推移

用が可能にならなかった。さらに改修前のオムツ利用が可能となった人数割合の月推移をまとめた図9の曲線は、改修後のトイレ利用が可能になった割合を示した曲線に類似しており、オムツ利用が可能な子どもは身体的にはトイレ利用が可能であると考えられる。

6. 総合考察

＜調査Ⅰ＞と＜調査Ⅱ＞の結果から考察を行う。

0歳、2歳のトイレの配置を見てみると半数以上の園で保育室内にトイレがない。0歳の場合はまだオムツに頼って、トイレの出番が無いと考えられているからなのかもしれない。しかし＜調査Ⅱ＞の調査対象であるA保育園での1歳児がトイレに一人で座れるようになる月齢の早さを考えると0歳の保育室にもトイレがあっても十分に出番があると考えられる。しかし設備の考え方が現状のままでは子どもの発達の現状に則した保育はいつまでたっても実現しないばかりか、変えようのない設備の中で保育をしているとそれに気づくことも難しくなってしまうのではないだろうか。子どもの実際の発達や能力を改めて見直し、保育環境に反映させていく必要があるだろう。0歳クラスの後半では既に1歳以上になっている子どもが多いことを考えると、十分にトイレ利用が可能な発達状況である。それにもかかわらず、0歳児の保育室内にトイレが無い園も多い。トイレに座れるようになったからといって、オムツがすぐに取りれるわけではないので、保育者してみれば、子どもがトイレに座れても座れなくてもオムツは必要であり、オムツだけで保育を行う方が楽だという考え方もあろうが、それでは子どもの発達に寄り添った保育とは言えないのではないだろうか。＜調査Ⅰ＞では0歳も1歳もトイレが室内に直結していてもトイレの利用率が全体的には低く、単に近くにあるというだけでは使い良いトイレ環境にはなっていないということも垣間見られた。

また1歳、2歳がトイレを利用する際に保育者が大変に思うことをまとめた結果では、子どもをひとりでトイレに行かせることが出来ない、すなわち主体的にトイレに行かせることが出来ないトイレ環境が浮き彫りになった。一緒についていかなければ危ない、床が濡れている、スリッパにつまづく、器具が少なくていざこざが起こる、保育室と離れていて遊びを中断してまで子どもが行きたがらないなど、保育者が主導で連れて行くことによって起こる大変さ、設備の造り方の問題がみごとにあがっている。これら的大変さが環境要因によって引き起こされていることを保育者たちは気づいているだろうか。その環境の中に浸かっているのはそれが当たり前のことだと認識し、なかなか気づけないのではないだろうか。当たり前だと思われている不適切な環境によって、保育者は無駄な労力を強いられていることになる。A保育園の保育者は「改修後に子どもが主体的にトイレに行くことが可能になったことで、トイレタイムは世話に追われる時間から子どもに向き合い、行動をゆっくり見守る時間へと変化した」と述べている。環境を整えれば子どもの能力は今よりもずっと発揮できるにちがいない。

注)

- ・＜調査Ⅰ＞は2009年に日本保育学会第62回大会にてポスター発表を行ったデータを分析し直し、大幅に加筆、修正したものである。⁴⁾
- ・＜調査Ⅱ＞は2007年にこども環境学会でポスター発表を行ったデータを分析し直し、大幅に加筆したものである。⁵⁾

＜参考文献＞

- 1) 金山 美和子・丸山 良平 (2007) 幼稚園・保育所の3,4,5歳クラス幼児における排泄の自立の実態と保育者の意識 上田女子短期大学紀要, 30, 49-59
- 2) 村上智子 (2012) 保育園における幼児の排泄自立とトイレ環境・排泄援助の影響 東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要 - (2), 25-40
- 3) 村上八千世・根ヶ山光一 (2007) 乳幼児のオムツ交換場面における子どもと保育者の対立と調整—家庭と保育所の比較— 保育学研究, 45, 2, 19-26
- 4) 村上八千世・寺田清美 (2009) 保育所における排泄環境の現状 日本保育学会第62回大会発表論文集, 167
- 5) 村上八千世・馬場耕一郎 (2007) 乳児のためのトイレプランニングにおける考察 こども環境学会2007年大会論文集, 71

本学に於ける能動的学修の拡充について

紙透 雅子

1. 緒言

大学教員を対象とした能動的学修に関する研修¹⁾を2014年度に3回に亘り受講した筆者は、既に2015年3月2日、本学FD研修会に於いてその概要を報告済みである。しかし、文部科学省がその通達などにより、高等教育における重要な課題として位置づけるこのテーマについては、今一度論文にまとめ記録に残す価値があると考え、ここに詳細の報告を行うものである。2015年度に筆者が参加した「能動的学修の教員研究会」²⁾の内容なども補足しながら、論述してみたい。

2. 大学教育に於ける能動的学修とは

大学教育とは本来、「学生が主体的に事前の準備、授業の受講、事後の展開という学修の過程に一定時間をかけて取り組むことをもって単位を授与し、また、このような学修経験を組織的、体系的に深めることをもって学位を授与する」³⁾ものとされている。つまり、「学修」とは、学生がそれぞれの目的をもって自主的に取り組む活動であり、既に存在する知識や技能を、手本をまねて繰り返すことにより獲得する受動的な「学習」とは、異なるものとされる⁴⁾。

しかし、日本の大学教育に目を向けてみると、学生の平均的な学修時間が1日4時間程度（その内訳は、授業時間2.8時間、卒業論文など0.5時間、自主的学習0.9時間）に留まっているのが現状である⁵⁾。この現状を打開していくためには、日本の大学教育に於いて、本当の意味の「学修」がどのように位置付けられ、その実現のためにいかなる工夫がなされるべきかを、真剣に考え、取り組んでいく必要がある。文部科学省が2014年度より「大学教育再生加速プログラム：通称AP事業」を開始した意図も、そこにあった。

3. 能動的学修の技法

学生の自発的な学びを促進するためには、単に掛け声をかけるだけでは不十分であり、そこには教員側からの積極的かつ意図的な働きかけが不可欠であることは言うまでもない。従って大学

教員は、どのような働きかけができるのかを、具体的に把握し、それらのうちのどの技法を、自己の授業計画のどの部分でどのように活用したら、学生の能動的学修を保障できるのかを、シラバス作成の段階で検討しなければならない。

参考までに、能動的学修と密接に関わる技法を、表1. (p.45参照) に挙げておく。

4. 能動的学修を成功に導く鍵

能動的学修を活性化するために、大学教員が表1. に示されたような技法を駆使したとしても、学生の反応が今一つであり、落胆の憂き目を見ることは珍しいことではない。意気込んで授業を成功させようとするほど、計画どおりに授業が進まないことに、焦りや苛立ちを感じることは、誰にも経験のあることと思われる。いろいろな技法を把握し、それらを断片的に用いるだけでは、学生たちの能動的な授業参加は期待できないと考えておく方が、むしろ無難であろう。特に、能動的な学修場面を導入しにくいと考えられがちな講義の場合には、より戦略的な工夫が教員に求められることは、自明の理である。

能動的学修を成功に導く鍵として、筑波大学医学医療系講師の三輪佳宏氏は、以下の4点を挙げている⁶⁾。

- 暗黙知を形式知に変換する経験をさせること：誰もが直感的に知っていることを理論的に裏付けする過程を、学生たちの目の前で展開して見せることにより、彼らの能動的学習への明確な傾向と対策を導くことができる。
- 情報を質的に変化させ、納得感を与えること：存在は知っていたが、その意味や内容は知らなかったことを、情報の普遍化を図ることで納得感を与え、能動的学修への意欲を掻き立てることができる。
- 視点を変えて解説すること：同じ話題でも、包括的・客観的な立場から俯瞰的に説明すると、学生は受動的になりやすい。逆に、その話題の中心的人物の立場に立つなどして、主観的な観点から解説すると、学生の感情移入が容易となり、参加型の授業となりやすい。両者のバランスをとりながら授業を展開すると、学生の集中が長続きする。
- 全てを説明しようとしめないこと：限られた授業時間の中で全ての情報を網羅しようとするのは、物理的に不可能な場合が多く、学生は受け身になりやすい。焦点を絞って限定した知識やテーマのみを深く追求していく授業形態にすれば、学生の興味・関心が高まりやすく、能動的な参加が期待できる。残りの領域が、学生の受動的な態度を強いる解説となっても、学生の満足感はやさしい。

要するに、学生の興味・関心を引きつけ、彼らの集中が持続するような授業展開を積極的に工夫することが、大学教員にも求められているということであろう。

表1. 能動的学修を導くための技法

目的	技法	特徴
情報収集と情報整理	文献調査	図書館の利用方法を把握して実行
	インターネット検索	検索サイトの利用
	インタビュー	他者との対話を通じた情報収集手段
	ノートの取り方	体験学修での経験を振り返り、気づきと思考を記録
	課題調査	課題に関する調査を行い、その結果をまとめて発表
相互学修	相互教授法	学修者が教師と学生の役割を担当しながら対話することにより、理解を促進
	レジュメなどの作成	発表内容の要点を発表の流れに沿って簡潔に提示
	ワークシートの活用	演習に於いて学修者が情報を整理・分析するのを助け、一定の筋道に沿った思考を促進
	理解促進テスト	グループ討議を通じて、学修内容の理解促進を図る
協働・創造	ブレインストーミング	他の学修者の発言・発想から相互作用や連鎖反応を受け、多数のアイデアを生み出すことが可能
	カード法	カードに書き出すことで、学修者のアイデアを引き出しやすくなる。その後の情報整理と構造化が容易
	ワークショップ	短期集中型の学修形態。小集団の相互作用と能動的活動、他の分野の学修への転移が期待できる
体験学修	事例研究（ケーススタディ）	多様な形態の授業に取り入れやすい。事例を明示する短い文章と、ディスカッションの要点を提示する必要あり
	課題解決演習（教育ゲームなど）	協力、コミュニケーション、チームワーク、情報伝達、調整、意思決定、改善などを目的とする。6名程度のグループを4～6班準備できるクラス規模での実施が適切
	フィールドワーク	学修者自身がテーマを設定し、適切な現場を選んでインタビューや観察を行い、考察・報告
	学内プロジェクト	学修者が学内で提示される課題を元に調査などを実施し、把握された事実や意見を分析し、課題解決案を創出
	学外プロジェクト	周辺地域や産業界の協力が必要。教員はファシリテーターとしての役割を担当

註) 全国大学実務教育協会（編）『能動的学修の教員研修リーダー講座テキスト』2014より筆者が作成。

5. 本学に於ける能動的学修の実践例

前掲3.及び4.で解説された能動的学修の技法や戦略は、おそらく本学でも様々な授業で、意識的あるいは無意識的に実行されているものと推察されるが、筆者の本学に於ける授業での実践例を以下に述べ、教員諸氏の参考と批判に供したい。

5-1. 現代教養講座「スポーツ論」(講義)に於ける取り組み

この科目に於ける学習の到達目標は、以下の3点である。

- スポーツは社会的な影響を受けながら、長い年月を経て変化・発展してきたことを理解する。
- スポーツは今後も、人々の意識と共に変化し続けていくであろうことを理解する。
- スポーツに於ける男女平等の実現とは、どのようなことかを考えてみる。

これらの目標の到達に向かい、筆者が教員として最大限に努めていることは、学生たちに自ら考えてみる機会を与え、それを仲間たちに発表する機会を保障することである。

この授業の計画は、表2. (p.46参照)に示すとおりであるが、まず初回の授業では、学生がスポーツに対してどのような意識を持っているかについて、簡単な調査を行いながら、彼らのス

表2. 2015年度 現代教養講座「スポーツ論」授業計画

回数	主要テーマ	活用する能動的学修の技法
1	あなたはスポーツが好きですか？	インタビュー（自己紹介）
2	スポーツとは何か	ブレインストーミング
3	スポーツの特徴と分類	カード法
4	男性向きのスポーツ、女性向きのスポーツ	グループディスカッション
5	女性のボクシング	
6	スポーツに於ける平等とは	グループディスカッション
7	イスラム文化圏における女性スポーツ	
8	女性のスポーツ参加の実情	
9	スポーツに参加してみましょう（1）	ゲーム
10	スポーツに参加してみましょう（2）	ゲーム
11	女性スポーツの歴史	
12	女性の体力	
13	女性のスポーツ障害	
14	スポーツに参加してみましょう（3）	ゲーム
15	総まとめ	

スポーツへの興味の度合いを測ることに努めている。受講者数にもよるが、学生たちが2名1組で自己紹介をし合いながら（インタビュー）、スポーツを行うことや観ることに對する好みを述べ合い、その結果をクラス全体に発表し合う活動を取り入れている。

続く2回目の授業では、スポーツの定義を考えるため、学生たちがスポーツと考えている活動の名称を合計100個列挙するブレインストーミング活動を、必ず行うようにしている。この活動では、学生たちは誰一人として受け身でいることはできないが、自分たちの考えが直接的に授業の進行に反映されていくことに喜びを感じ、積極的に取り組む姿が見られる。

さらに、第3回目の授業では、前回の授業で出しあったスポーツ活動の名称を、学生自らが定めた基準によって分類する作業を、数名ずつのグループに分かれて行う。これらの活動を通して、スポーツと呼ばれる活動の範囲の広さを認識し、スポーツという言葉を定義付けすることの難しさに、自然と気づいていくのである。

こうした活動の中では、学生たちの柔軟な発想や奇想天外な発言内容に、時として戸惑いも感じるが、それらは総じて楽しい刺激である。そして、学生の意見が十分に授業の進行に貢献しているという自覚と満足感が教室の中に生まれ、能動的学修が軌道に乗ることに多大な貢献をすることは、間違いないことである。

さらに後半の授業では、スポーツを実際に行う時間を1～2回設け、女性がスポーツを行うことの意味を、学生たちが改めて考える機会としている。

このように、講義科目であっても、教員が受講者の能動的学修を促す努力と働きかけをすることは、十分に可能である。その効果は、表3. に示した学生による授業評価の内容に如実に現れている。特に、授業の中で頻繁に行われた意見交換や発表、ブレインストーミング的な活動、そ

表3. 現代教養講座「スポーツ論」に於ける能動的学修に関する学生の評価

調査実施年度	評価内容
2012年度	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の中で、多くの人と意見交換する機会があった。 ・発表の機会が多くあり、自分の意見を話す力を養えた。 ・自分たちで考える時間が多くあり、とても勉強になった。 ・講義だけでなく実際にスポーツをする機会もあり、とても楽しく授業に参加できた。
2013年度	<ul style="list-style-type: none"> ・実際にスポーツをすることができて楽しかった。 ・一つの内容について、深いところまで詳しく学ぶことができた。
2014年度	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちでスポーツを分類していく授業が楽しかった。 ・毎回ほぼ全員に発言の機会があり、皆で授業を受けているという感覚が強く、楽しかった。 ・学生が発言しやすい雰囲気があった。 ・学生の発言内容を教員が主要テーマと結びつけて授業を展開したので、わかりやすく楽しかった。 ・自主的にスポーツの歴史に関する本や新聞記事などを読む課題があっても良かった。

注) 2010～2014年度の各年度に実施された常磐短期大学「学生授業評価」結果報告の自由記述内容より、筆者が編集。

して限定された回数ではあるが、実際にスポーツを体験する活動は、本学学生の評価が高く、彼らの能動的な授業参加を促していることが伺える。

5-2. 幼児教育保育学科「身体活動論」(講義)に於ける取り組み

この科目に於いても、学生たちの能動的学修を意図した活動をいくつか取り入れているが、その一つは、4週間に亘り毎日、安静時の心拍数・基礎体温・体重の測定を行い、その結果をグラフにまとめて提出する課題である。二つ目は、運動やスポーツ活動に伴う心拍数の変化と消費熱量の測定を行う、実習である。

これらの課題を行うことにより、受講者は自己の身体のコンドিশョンの変化を見つめ、健康管理にどのように生かすことができるかを考える機会をもつことになるのである。何よりも、他の回の授業での講義内容を、自分自身の身体の変化を把握することを通して再認識し、理解を深め、問題点を見出すことにつながっている。このことは、授業終了時に収集される受講者の感想などからも確認できており、本学学生を対象とした講義の中に、演習・実習形式の授業を部分的に取り入れることの効果を示している。

5-3. 幼児教育保育学科「基礎体育Ⅰ」(演習)に於ける取り組み

1年生が入学直後に取り組むのが「基礎体育Ⅰ」の授業であり、縄跳びの試験課題をこなす上で必要な技の習得に、学生たちが主として個別に取り組んでいく授業である。

言うまでもなく、学生によって得手・不得手が明確に存在し、習得の進度に著しい差が開く活動であるが、早く課題を習得した学生たちには、遅れの日立つ学生たちへのアドバイスと練習の補助を行う課題が待っている。他者をどのように援助したら良いかを考えさせ、その目的に従って実行を促すことは、まさしく能動的な学修といえるであろう。卒業後は保育者となって幼児や

その保護者を導く役割を担う学生たちにとっては、不可欠な取り組みと自負する次第である。

5-4. 幼児教育保育学科「総合体育」(実技)に於ける取り組み

2年生の秋セメスターの科目であり、卒業を目前に控えた学生たちの総仕上げ的な意味合いが強い。いわゆる体育実技の授業であり、保育という枠組みを超えた楽しい活動を展開しながらも、授業の準備と片付けを進んで行くこと、道具を大切に扱うこと、活動中の危険を回避するために、活動範囲の確認を励行したり、他者への注意喚起のための声かけを徹底したりするなど、保育の仕事にも直接役立つような教育的配慮に努めている。

体育実技の授業では、ともすれば、学生たちが指示されたことだけをこなして終わりがちであるため、この授業で行われるバレーボールやバドミントンのグループ対抗戦に備えた練習では、学生たちが自ら工夫をしながら練習メニューや方法を考えて取り組むように働きかけている。例えば、上達のために何をどのように変えたら良いかを考えさせ、ヒントを与え、進歩を認めて褒めることを前面に押し出すといった具合である。また、スポーツの得意な者にはリーダーの役割を明確に与え、他者を牽引する姿勢を育てるように働きかけている。

このような授業方法では、教員が全て指示を出して受講者を動かす方法よりも、軌道に乗るまでに時間がかかる傾向はあるが、受講者の満足感や、自ら行動しようとする意欲や工夫しようとする姿勢に、確実に繋がっていくはずである。

5-5. 幼児教育保育学科「課題研究」(演習)に於ける取り組み

2年生の1年間を通して、一定の課題の元に研究を行う授業であり、能動的学習の機会を最も与えやすい授業である。

筆者の担当する授業では、類似の関心事を持つ受講者が集まってグループを作り、研究テーマを定め、保育園での部分実習を行いながら学修を進める方法をとっている。グループの作り方によっては、能動的学修への意欲の高まりに差が生じることは避けられないが、より積極的に活動するグループから刺激を受け、改善される場合もある。何よりも、保育の現場で接する幼児や保育士の姿に、学生たちが触発されることに大きな期待を寄せている。そのためにも、学生たちの気づきを促すための働きかけをいかに行うかが、教員の工夫のしどころである。

学外での実習や多くの補講、就職活動など、多忙を極める2年生にとって、研究活動に十分な時間を割くことは難しいが、自ら課題を見出し、課題探求のためにどのような手法をとることが可能かを検討・実行し、得られた結果から考察することを、一通り体験しておくことは、保育者となる彼らにとって有益と考える。

6. 今後の能動的学修の機会拡充の可能性

短期大学に於ける教育に於いて能動的学修の機会を保障しようとする際、決定的な制約となる

のは、時間不足である。2年間という短い時間の中で、さまざまな規程に縛られたカリキュラムによって必要単位を修得し、免許や資格を得ることのみに学生たちが終始すれば、一方的な知識・技能の習得、すなわち「学習」の域を出ることは叶わない。特に幼児教育保育学科では、国家資格である幼稚園教諭2種免許と保育士資格の取得に向かって、入学初日から、学生たちのわき目も振らぬ奮闘が始まる。そのような生活の中で、いかに学生たちに能動的学修活動に興味・関心と意欲を持たせるかは、教員側の工夫に頼らざるを得ない。

特に、表1. (p.45参照) に示した「体験学修」の実施には多くの困難が伴うと予想されるが、筆者の考える本学に於ける取り組みの可能性を、以下に示してみよう。

6-1. フィールドワーク

本学のキャリア教養学科・幼児教育保育学科に共通して提供される科目である「課題研究」は、フィールドワークを実施するに最も相応しい科目であろう。

筆者の「課題研究」の実践例は、既に5-5.で紹介したが、そこでも研究テーマをより明確にすることで、より一貫した指導が可能となるであろう。

また、単年度の研究を、次の年度の学生に引き継いでいくことも、教員が長期的な視点を持って授業計画を立てれば、可能となる場合もみつかるとは思われ、今後の課題とすべき点と考える。

6-2. 学内プロジェクト

幼児教育保育学科では、「幼教フェスタ」と称した学生の研究発表会を毎年度実施しているが、この行事の開催は、学内プロジェクトの一つと捉えることができるであろう。数年後からの学外会場での開催を目指し、プログラムや開催方法について、学科内での検討が始められている現在、この運営への学生の積極的な参加を呼びかけていけば、彼らの能動的学修の機会を保障することに繋がるものと思われる。

6-3. 学外プロジェクト

本学学生の学修の機会を学外に広げていくことは、より多くのエネルギーが学生にも教員にも求められる。幸いなことに幼児教育保育学科では、保育実習と幼稚園教育実習という学外での活動が、資格・免許取得のための必修科目として、ほとんど全員の学生に課せられている。この特殊な状況を生かし、それらの科目を学外プロジェクトの一部と位置付けることは、あながち不可能とは言えないのではないか。

例えば、特定地域内の保育園・幼稚園側から投げかけられる共通課題に対し、その園で実習をさせていただいた学生たちが実習終了後に意見交換や簡単な調査を行い、まとめられた提案を園側に戻していくことなどが考えられる。例えば、「水戸市立幼稚園における研究プロジェクト」などと銘打った活動は、地域密着型の本学の特性を、より強固なものとするに効果的と推察され

る。そして、このプロジェクトに取り組んだ学生に対し、「課題研究」の単位を与えるなどの措置も、検討に値するであろう。

一方、キャリア教養学科には、地元企業と連携した「インターンシップ」という科目が存在するが、ここ数年、履修する学生の減少が目立つのが現状である⁷⁾。概ね5日間という短期間の職場体験を主体とするこの科目を、学生たちにとってより魅力的なものにする、あるいは発展させるための方策として、この学外プロジェクトの視点を盛り込むことには、一考の余地があるであろう。

学生が職場の実体験をしながら、企業側から投げかけられた課題について検討し、アイデアを提供する。そのアイデアの中で実現可能と思われるものを、企業側と共同で実現に向けて行動してみる。そのような活動は、まさしく学生にとって能動的な学修であり、彼らが社会に貢献することの意義や喜びを、実体験の中で汲み取っていくことは、地域に貢献する本学にとって大変に意義深いことではないだろうか。

6-4. 両学科の連携

本学に於いて残念なのは、二つの学科の学生たちが共に協力し合って学ぶ場の少ないことである。既に述べられているとおり、幼児教育保育学科では、免許・資格の取得のための過密なカリキュラムを強いられており、新たな科目を追加することは困難な状況にあることは確かである。しかしながら、能動的学修の場を設けるという視点で見直してみれば、あながち可能性がないわけではない。

例えば、前掲6-2.で述べられた「幼教フェスタ」に、キャリア教養学科の学生の特別参加を認め、彼らの研究成果の発表を導入することは、プログラムの検討次第で可能になるはずである。

また、キャリア教養学科の開講科目である「国際文化研修」には、幼児教育保育学科の学生も関心を示しており、2014・2015両年度には、実際に研修旅行に参加した者も存在した。参加する学生たちに、能動的学修の機会を与えるようなプログラムを工夫することができれば、この状況をさらに活性化することは十分に可能と思われる。

6-5. 常磐大学との連携

本学にとって最も近い存在でありながら、両者の共同プロジェクトやイベントの少ないことは、今後の課題として検討されるべきである。

幼児教育保育学科では、最も共通項の多い人間科学部教育学科との連携の可能性が考えられる。「幼教フェスタ」への特別参加や、学外プロジェクトとして、幼稚園教育・保育に関する研究へ共同参画するなど、アイデアを出し合い、時間と予算の工面をしていくことで、可能性は広がるであろう。

7. 補足

これまでに述べられたような方向を目指し、本学に於いて能動的学修を拡充していくためには、教職員のみならず、事務職員も組織的に連携する姿勢を持つ必要のあることを付け加えておきたい。両者が高等教育機関としての本学の存在意義をもう一度見直し、柔軟な発想を生かして進むことが求められるが、このような姿勢は、必ず地域社会に認められ評価されるものと信じ、努力を積み重ねたい。

参考・引用文献及び脚注

- 1) 2014年8月～10月に3回に亘り東京都内で開催された、一般財団法人全国大学実務教育協会主催「能動的学修の教員研修リーダー講座」
- 2) 2015年8月28日、一般財団法人全国大学実務教育協会の主催により、東京都内で開催された。
- 3) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を養成する大学へ」、2012年8月28日
- 4) 館昭『原理原則を踏まえた大学改革を－場当たり策からの脱却こそグローバル化の条件』東信堂、2013、p.191
- 5) 金子元久『大学教育の再構築－学生を成長させる大学へ-』、玉川大学出版部、2013、p.35
- 6) 前掲3) pdf資料、三輪佳宏「能動的学修への転換」、2015年8月28日
- 7) 過去5年間に於ける「インターンシップ」の履修者数は、以下のとおり。
2011及び2012年度：各7名、2013年度：16名、2014年度：2名、2015年度：7名

好ましい英語と 通じる英語

村松 俊子

イギリス作家 Frank Tuohy (1925–1999) の日本滞在の時期は二度にわたる。一度目は1964年から1967年にかけて早稲田大学客員教授としての三年間、そして二度目は1983年から1989年にかけて立教大学客員教授としての六年間である。大学において教鞭をとることが滞在の目的ではあったが、同時に小説の執筆も続けている。36編の短編をまとめた *The Collected Stories* (Macmillan, London, 1984) の出版は日本滞在中である。

トゥーイが小説以外の形態を媒介にして、母語としての英語について意見を述べることはほとんどなかったが、全くなかったわけではない。ここに翻訳紹介する「第8回日本時事英語学会」(1966)における特別講演は、そうした意味で貴重であり、作家自身による言語に対する態度の表明として価値あるものである。日本の大学で英語や英文学を教える中で、トゥーイにとって英語の使われ方が奇異に映る場面は少なくなかったと推測される。

以下の講演では、「好ましい英語」と「通じる英語」の違いは何か、さらには英語によるコミュニケーションの基本とは何かに関する持論が展開されている。複数の英語 (Englishes) が存在する今日ではあるが、だからこそ言葉の担い手にとって考えを正確に伝達することこそが最も重要であるとトゥーイは強調する。ここでは、小説家であり英語指導者でもあるトゥーイの言語表現のあり方に対する識見が披瀝され、言語を運用する職業人ならではの鋭い指摘が、とりわけ現代英語に関する有益な証言として残されている。

(1)

本日お集まりの方々、「好ましい英語と通じる英語」¹というタイトル——決めるまでには時間がかかるものですが——からレクチャーのようなものを思い浮かべるかもしれません。しかしここで私は、日本などにおける「通じる英語」について考えを述べ、その一方で私にとって

2015年11月17日受付
MURAMATSU Toshiko キャリア教養学科・非常勤講師 (イングリッシュ・リテラシー)

「好ましい英語」とは何かを話したいと思います。

申し上げておくことが2つあります。まず1つ目は、私は言語学者でも研究者でもありません。パートタイムの職業作家です。日本の有名私立大学²で教えていますが、「先生」と呼ばれるにふさわしいかどうかは疑問です。というのも添削課題を抱えた学生が来ると、私はオックスフォード辞典の異なる版に目を通したり、実用文法書などを頼るので彼らは驚きを隠せません。「教師」は知らないことを自ら認めるべきではないのでしょうか。私も自覚していますから、場合によってはそのように対応します。しかし若いころに、「参考図書を調べずして、人は何も覚えることはない」と教えられ、この教えに忠実に従ってきました。ですから手に入るあらゆる知識の装備が私には必要なのです。それは英語を「書く」ことは「選ぶ」行為だからです。つまり言葉と意味に囲まれて奮闘し、ひとつひとつ段階を踏んでその意味を判定していくことですから、この講演でも言葉の意味の判定を行いたいと思います。たとえパートタイム作家であってもやるべきことでしょう。「好ましい英語」とは何か、話を進めて参ります。

さて2つ目ですが、この学会は「日本時事英語学会」(The Japan Association of Current English) という名称です。英語表記に付けられた「カレント」〈Current〉という言葉の意味の定義を試みると、現代の解釈のし方を批判することになりますが、だからといって日本の英語教育に関するものではないと申し上げておきます。実は私は4つの外国語をそれなりに真剣に学びましたが、習得できたのは1つの言語にすぎません。みなさんにとっての英語と同様です。その言語が母語として使われる国で学びながら、まる2年もかかりました。ですから外国語学習で苦労したことのない人が、外国人の使う英語について熱弁をふるうことほど嫌なことはないと思っています。

ここでは謙虚に話すつもりですが、もし独断的な言い方になったなら、それはわが母国民と私自身に向けられたもののご理解いただきたいのです。

ところで「カレント・イングリッシュ」〈Current English〉とは何か。「カレント」の第一義は川のような「流れ」で、実際絶えず変化するものです。2番目の意味は1週間、1ヵ月、1年という「時の流れ」です。これに意味の定義は要りません。学会名称に使われている「カレント・イングリッシュ」という表現は、流れのない「ノン・カレント・イングリッシュ」より良いとも悪いとも言い難いのです。以前に私の同僚がこの学会は別名〈the Society for Journalese〉と言ったので、私には驚きでした。「新聞英語」〈journalese〉が軽蔑的な言葉だからではなく、意味の定義が必要だからです。こんな名称を使うのも、日本人の温厚な国民性のせいでしょうか。私には「新聞英語」の言葉そのものも概念も〈non-current English〉の典型に聞こえます。

〈journalese〉とは、私の常用する辞書によれば、新聞などジャーナリズム特有の文体、あるいは「三文文士、請負作家」〈penny-a-liner〉の英語という定義です。「三文文士」とは1行1ペニーで執筆文の支払いがなされ、あらゆる技巧的な表現、凝った言い換え³、多音節語などを駆使して、注文通りの長さで原稿を書く作家のことを指します。現在でもスポーツ記事にその片鱗がみ

られます。たとえば英字新聞の地方版に掲載される大相撲記事にありがちで、横綱「大鵬」なら〈Golden Boy〉、〈the Big Bird〉、〈320-pound Yokozuna〉、〈the Grand Champ〉と決まっています。

近頃のジャーナリストはこんな時代遅れの新聞体は使わないでしょう。今日新聞や雑誌で話題になるのは、「組版スタイル」〈house style〉といわれる独自の用字用語の書体や組み方です。独自の様式が採用される例が2つあります。どの記事も複数の書き手によって構成される編集委員会が扱うからです。雑誌『タイム』⁴や『ニューズウィーク』⁵のトップ記事は、聞くところによると、レポーターやリサーチした者の投稿原稿を8万語のダイジェスト記事（短編小説の長さ）にまとめたものだそうです。その結果動画仕立ての記事にはなっても、没個性的なものとなります。躍動感はあるても、生命感には乏しいわけです。いわばギャグ作家たちの共作による、ジョーク満載のドタバタ喜劇のようなものでしょうか。また別の「組版スタイル」とは、編集者や編集役員会からの——いずれにせよ厳密な——指示によるものです。あの有名な雑誌『ニューヨーカー』⁶の例を挙げてみましょう。雑誌掲載を承諾されたある投稿者が、編集者から手紙を受け取ったのです。「あなたの小説は思ったほどには手直しの必要がなく、本当に助かりました。』『ニューヨーカー』のいう「多少の手直し」を投稿者は違ったように受けとめました。長期にわたるやりとりの末、やっと小説は日の目を見るのですが、独特の個性的な文体は跡形もなく、どこにでもあるすらすら読める小説になっていたということです。

ここでは、「カレント・イングリッシュ」が私にとっては「新聞英語」ではないということ、さらには、名のある雑誌の方針が、生き生きとした時の流れの中で洗練された文体を奨励してはいない、ということを描したにすぎません。

「好ましい英語」には文体の議論が必要ですが、「通じる英語」はむしろ語彙や語法が問題となるでしょう。W. S.アレンの名著『生きた英語構文』⁷には、次のような記述があります。「本書は、英語ではこのように言うべきだとあえて学生たちに伝えるのではなく、実際に使われている英語を示すつもりである。」教師にとっても英語ライティング学習者にとっても幸いなことに、本著にそのような英語は示されておりません。たとえあったにせよ、私は使うつもりはありません。

アレンはイギリス中流階級特有の言回しに限定しています。すなわち彼自身がこれらの表現だけが実際に使われていると捉えているわけです。同時にこのことはイギリス中流階級の姿勢を示すものですから、一般的な「カレント・イングリッシュ」とはいえません。アレンは上流階級特有の表現を省いています。それは理解しがたい暗号のようなものです。14才から18才までの間上流階級の若者は同じ学校に在籍して、必要なことをすべてこの間に言い尽くしているからです。さらにアレンはイギリス国民の80%が使う英語を省いています。ですからロンドンに着いた外国人観光客は、何を言われてもわけがわからない、という事態に陥るのです。

アレンの著書は、「好ましい英語」に「通じる英語」を転化させました。それは言いたいことを「最良の言い方」で表現したい人たちの英語なのです。

(2)

アメリカでは聞くところによると、この過程が反対になっているということです。構造言語学の影響が『ウェブスター辞典』⁸の新版に見られます。この版はドワイト・マクドナルド⁹によって酷評されました。口語表現や誤った英語が文学用語や学識ある人たちの使う英語と混在して、優先順位の説明もなく列挙されているからです。この辞書には長所など見当たりません。辞書は言葉の珍種を陳列する場所ではありませんから。

2、3日前に私は『ランダムハウス辞典』¹⁰の新版にディズニー映画『メアリー・ポピンズ』¹¹からの長々しい呪文めいた言葉¹²が載っていることに気づきました。3ヵ月ほどで完全に忘れ去られるたぐいの映画ではないかと思いますが。だからといって、かつては私たちの言語の唯一の立法者であったイギリスの辞書編纂者のほうが、はるかに優れているというわけでもありません。戦後いち早く、戦時中に生まれた大量の新語を取り入れましたが、そのほとんどが今では使われなくなっていますから。

さて「カレント・イングリッシュ」と新語や成句というテーマは、スラングという難問へと発展します。エディンバラ大学デヴィッド・アバークロンビー教授¹³は次のような詩を引いています。

スラングといえは効用はひとつ
群れのひとりになれること
時が過ぎれば
耳障り¹⁴

外国語を習い始めたころは、たとえ使うつもりがなくてもみなスラングに惹かれるものです。ちょうど異国の町に着くと、行く気もないのに歓楽街の場所を知りたくなるようなものではないでしょうか。しかしスラング常習者にならないうちに、厳しく自分に問いたださなければなりません。「私は群れのひとりだろうか？」母語話者でない限り、95%の答は「ノー」です。アバークロンビー教授によれば、外国人学生が覚えたてのスラングをおそろおそろの会話の中で披露したりすると、敵意ともいえる不快感を露わにされるそうです。

もう一つ手厳しい質問があります。「そのスラングはいつ覚えたのか?」「時が過ぎれば／耳障り」、これは聞き手の苛立ちを誘発するという意味です。

スラングは確かに「通じる英語」のひとつです。理解したければ、誰でも理解できるようにはなるでしょう。しかし私たちにとって活用できる語彙とは、身につける衣服のようなもので、意識するしないにかかわらず、人に印象づけたい感情表明なのです。もしも私が「能なし」〈goofball〉、「ヤク中野郎」〈wizzkid〉、「落ちつけ」〈play it cool〉、「キレやすい」〈ornery〉、「ま

さか、うっそー」(the hell you say) などを使うとしたら、赤毛かつらをかぶり別人になって人前に出るしかありません。通じる英語には違いありませんが、私には不要ですし、みなさんにとってもそうでしょう。生来エキセントリックな行動とは無縁の人たちにとって「好ましい英語」といえるか疑問です。

作家は、書き始めるとき瞬時に選択を行わなければなりません。無神経な表現や陳腐な文句、意味のない語句などは、政治家や大学教授などのスピーチにありがちですが、使ってから後悔するものです。いわば他人の歯ブラシを使うようなもので、使っているときには違和感がなくとも、あとになって分ると強烈な嫌悪の疼きを覚えるはずで。

英語で書く段になって最初に気づくのは、読んでいるときに会う多様な語彙や文体のうち、実際に使えるのはほんのわずかしかないということです。著名な批評家のエドモンド・ウィルソン¹⁵はこの煩わしさについてこう述べています。「芸文評論誌に載っている小難しい専門用語は私には書けない。アメリカではこの専門用語に少々問題があると思う。一方では戯曲や小説の登場人物の言葉使いを、みなと同じように書かなければ、アメリカの平均的表現形式を持たないことになってしまう。」

実際にウィルソンの言は、アメリカ文学が他の文学よりもはるかに話し言葉の用法では秀でている点を言い当てているのです。ウォルト・ホイットマン¹⁶の詩やハックルベリー・フィン¹⁷の散文、これらは明らかに話し言葉による新しい文体です。アーネスト・ヘミングウェイ¹⁸はほとんどすべての作品で試みていて、彼の原点はここにあるのです。ちょうどJ. D. サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』¹⁹で、実際に少年が喋る言葉の文語版を作ることによって、著者が思春期の少年の心の中へ入り込もうとしたのと同様で、小説の成功はこの文体のおかげといえます。

イギリス作家の置かれた状況はかなり違ってきます。登場人物に普段話すように語らせるのは得意ではありません。ある想定上のことばで、作品全体を（『ハックルベリー・フィン』や『ライ麦畑でつかまえて』のように）書き上げたとしたら、男性作家なら不作法で無神経だと、女性作家ならつまらない毒舌家という印象を持たれるでしょう。一方で、エドモンド・ウィルソンの指摘にあるように、アメリカの学者たちが使う表現は堅苦しく、文体はぎくしゃくしていて、話し言葉として使うのは困難です。イギリスの学者たちは形式張らずに、場合によってはくだけ過ぎていますが、それでも『ニューヨーク・タイムズ』²⁰や『サタデー・レビュー』²¹にはロンドンの批評家の記事が満載です。節約のための転載ではなく、イギリス人のほうが真面目なことでも仰々しくなく、さらりと扱うことに長けているからでしょう。

(3)

種々の語彙や文体に関する問題は作家に限られたことではありません。ラジオやテレビでも毎日のように悪文を教える例に遭遇します。これは教師の立場からの不満ではなく、コミュニケーションが断絶する可能性を懸念してのことです。

ある有名なイギリス詩人は、先の大戦中ロンドン空爆のときに補助消防団員になったのですが、次のような経験を語っています。臨場感ある爆撃報道が欲しいときは、読み書きのできない人にインタビューしたというのです。読み書きのできる人はただ「炎の地獄²²でした」とだけ答えるからです。質問はこうです。「現場に着いたとき、何を見ましたか?」「炎の地獄です。」「屋根は崩落していましたか?」「その通り、ですから炎の地獄でした。」くだんの人物はダンテ²³を読んだこともなく、地獄の存在さえ信じていないのに、ただ場つなぎのため機械仕掛けのような決まり文句を使ったのです。

今日私たちは「好ましい英語」を見つけれなくても、特別な階級や階層に足を踏み入れることはできません。しかし過去へ遡れば手がかりはあるかもしれません。最良の英語は生き残っているからです。

さきほど私はアメリカの作家たちは話し言葉を使うことには優れているのに、イギリスの作家たちは成功していないと言いました。この点についての私の推測は正しいのではないのでしょうか。つまり「書き言葉」と「話し言葉」の違いの問題を指しています。この違いはイギリスよりもアメリカでのほうが際立っていると思えるのです。たとえば、この大学の学食でこんな張り紙が目に入ります。(Please bring back your cups when you are through.) (済んだら〈through〉カップを戻して下さい。)まさか文学部の学生が書いたのではないでしょう。(through)の語は〈When Shakespeare was through with *Twelfth Night*, he started *Hamlet*.〉「シェイクスピア²⁴は『十二夜』²⁵を書き終えて (through with) 『ハムレット』²⁶に取りかかった」という具合に使います。(文学部学生が書いたのかもしれませんが) いずれにせよ、「終える」〈finish〉の一語だけではなく、熟語とその語法について学ぶべき時期でしょう。

「書き言葉」と「話し言葉」の関係は、特に日本と中国においては非常に複雑です。詳しくは分かりませんが、ヨーロッパでは国によって状況は異なります。ギリシアでは、現代口語ギリシア語を使う人は新聞が読めません。そして新聞でギリシア語を学べばレストランでワイン1杯も注文できないでしょう。方言の違いをポーランド語で書いて説明することは困難です。ですからウィリアム・フォークナー²⁷の翻訳など絶望的です。またフランス人から手紙を受け取ると不思議な気分になります。実に多彩な丁寧語を使いこなすのですが、彼の口からは聞いたこともない言葉ばかりなのです。

イギリスとアメリカでは書き言葉そのものが二分されがちです。流行している散文と気取らない文体—— 要は男性が言いたいことを言うときに使う —— との間にはずれのようなものがあ

ります。これは16世紀になるまで言われていたことです。つまり書く作業が苦行だった時代のことです。(東洋とは違って、西洋人にとって書く作業は楽しいものではありませんでした。)

貴族作家たちが凝った装飾的な文章を作り上げる一方で、平易な指示文などが料理や計算や馬術の説明に使われ、さらには発見や旅行の話が直接話法で書かれました。

「上手く書けている、分かるように喋っているのだから」と言ったのはジョンソン博士²⁸です。このような平易体は、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』²⁹——旅行記のパロディーにすぎないのですが——で文学のレベルまで押し上げられたのです。

教育の普及に従って、平易体での教育は影をひそめます。新しい教育や生半可な教育を受けた者が長たらしい気取った言葉を好むようになったからです。これはキーツ³⁰や天才貴族バイロン³¹の文学に見られ、中流階級には見られません。「話すように書く」人たちの文章にはまだ生き残る道がありますが、韻文をまねた散文などの中途半端なものはすたれるでしょう。

イギリスでは平易文への変化は、経験主義や啓蒙主義や科学的改革への人々の考え方の変化と呼応しています。サー・フランシス・ベーコン³²は「同じ方法で伝達される知識」³³を探求し、知識は発見されたその同じ方法で伝達されるべきであると提唱しています。のちになって、1660年設立の英国学士院の創設者たちは、「ほぼ同数の語彙で多くのことを伝えられる」文体を求めました。

もちろん不可能ですが、もし実際にあったらどうでしょう。新聞は四分の一の長さになり、私の講演もしかりです。たとえ不可能でも、一定の基準として認める価値はあるのではないのでしょうか。何か言いたいことがあるときに、「好ましい英語」の基本原則があれば、伝達する緊張感と秩序意識に影響を与えると思うのです。

私が初めて本を出版して³⁴文芸誌の女性記者にインタビューを受けたとき、なぜ短い単文で書くのかと質問されました。「私の作品がたとえばエスキモー語にも翻訳が可能であり、のちにそのエスキモー語から再翻訳できたときに、同じ意味を持つようにしたいから」と答えました。もちろん文化の違いによって、このような試みには危険が伴うということは承知しています。しかし「優れた散文とは、正確かつ出来るかぎり滞りなく読者の心に伝わるもの」であることを認めるなら、翻訳と再翻訳という危機を乗り越えなければなりません。

歴史を振りかえれば、深刻なコミュニケーション断絶の多くは考え方ではなく言語にまつわるものです。西暦1000年の東西キリスト教の亀裂の要因は、ローマ・カトリックの司教がギリシア語を、そしてギリシア正教の司教がラテン語を話せなかったことにあります。同様のちょっとした問題は近年のロシアと中国のマルクス主義の歴史にも言えます。好むと好まざるとに関わらず英語は今日国際語となっています。考えようによっては、国際語に適しているのはフランス語なのですが、これはすでに手遅れです。

今日私たちが英語を学ぶとき、あらゆる国民と共用するという認識が必要となります。ですから私たちの使う語彙がいかに最新流行の言葉を多用し、凝った表現で言い換えても、身につかな

ければ仕方ありません。スラングはすたれます。今や英語は —— もはや群れというには大きすぎる —— 4億人が使います。私たちのねらいは、考えを伝達することであって、語彙のずさんな集積ではありません。少なくとも「好ましい英語」を求める私のねらいはここにあり、「日本時事英語学会」のみなさんも同様であろうと思います。

(訳注)

¹ 本稿は、「第8回日本時事英語学会」主催の早稲田大学での講演会におけるフランク・トゥーイの講演のハイライトで、3回にわたり「毎日デイリー・ニュース」に連載された。

“Desirable English and Available English” (1) (2) (3) : *The Mainichi Daily News* (22,23,24 January 1967)

² 早稲田大学

³ “the elegant variation” 語の反復を避けるために、不必要な凝った同義語で言い換えること。

Henry Watson Fowler (1858-1933) が *A Dictionary of Modern English Usage* (Oxford University Press, 1926) の中で案出した表現。

⁴ *TIME* ニューヨークで発行されているニュース週刊誌。1923年創刊。現在の発行部数 (2500万部) は世界最大。

⁵ *Newsweek* ニューヨークで発行されているニュース週刊誌。1933年創刊。発行部数はタイム誌に次いで2番目。一時デジタル版のみとなったが現在は印刷版が復活した。

⁶ *The New Yorker* 1925年創刊の雑誌。元来は週刊誌だったが、現在は年47回発行。報道記事、批評、漫画、諷刺、小説、詩などを掲載。

⁷ W. Stannard Allen (1913-) : *Living English Structure* (1959)

⁸ *Webster's Third New International Dictionary* (1961)

⁹ Dwight Macdonald (1906-1982) アメリカの作家、編集者、映画評論家、哲学者。

¹⁰ *The Random House Dictionary of the English Language* (1966)

¹¹ *Mary Poppins* (1964) アメリカのミュージカル映画。ウォルト・ディズニー・カンパニー制作。

¹² “supercalifragilisticexpialidocious” 映画に登場して以来、長くて無意味な語を表すときに使われる。

¹³ David Abercrombie (1909-92) イギリスの音声学者。エディンバラ大学音声学科の創設者。

¹⁴ 作者不詳の詩

“The chief use of slang
Is to show you're one of the gang.
But when it dates
It grates.”

¹⁵ Edmund Wilson (1895-1972) アメリカの文芸評論家、作家。

¹⁶ Walt Whitman (1819-92) アメリカの詩人。

- ¹⁷ Huckleberry Finn *The Adventure of Huckleberry Finn* (1885) の主人公。
- ¹⁸ Ernest Hemingway (1898–1961) アメリカの小説家。
- ¹⁹ J. D. Salinger (1919–2010) : *The Catcher in the Rye* (1951)
- ²⁰ *The New York Times* 1851年創刊の日刊新聞。ニューヨークで発行される。
- ²¹ *Saturday Review* 1920年から1984年まで発行されたアメリカの週刊誌。
- ²² “blazing inferno”
- ²³ Dante Alighieri (1265–1321) 1304年から1321年にかけて執筆された『神曲』(*La Divina Commedia*) の第一部「地獄篇」“Inferno”を想起させる。
- ²⁴ William Shakespeare (1564–1616) イギリスの劇作家、詩人。
- ²⁵ *The Twelfth Night* (1599–1601)
- ²⁶ *Hamlet* (1600–1601)
- ²⁷ William Faulkner (1897–1962) アメリカの小説家。
- ²⁸ Samuel Johnson (1709–84) イギリスの詩人、随筆家、モラリスト、文芸評論家、辞書編纂者。
- ²⁹ Jonathan Swift (1667–1745) : *Travels into Several Remote Nations of the World. In Four Parts. By Lemuel Gulliver, First a Surgeon, and then a Captain of Several Ships*
- ³⁰ John Keats (1795–1821) イギリスの詩人。
- ³¹ George Gordon Byron (1788–1824) イギリスの詩人。
- ³² Sir Francis Bacon (1561–1626) イギリスの哲学者、政治家。
- ³³ *The Advancement of Learning* (1605)
- 「しかし、紡ぎつづけるべき糸として伝えられる知識は、できるものなら、それが発見されたと同じ方法で伝え知らされるべきであり、こういうことは帰納された知識なら可能である。」
- 服部英次郎・多田英次 訳『学問の進歩』(岩波書店1976) p.241
- 第2巻 人間と神とに関する学問の進歩のために、何がなされたか、また何が欠けているか
- (1) 理性とそれに属する術 (d) 伝達の術
- ³⁴ Frank Tuohy (1925–1999) : *The Animal Game* (Macmillan, London, 1957)

常磐短期大学研究紀要寄稿規定

制定 昭和51.11.24教授会

改正 昭和60. 3.19, 平成2. 4.18

平成10. 7.14

(目的)

第1条 専門委員会の設置および運営に関する規定第4章に基づいて発刊する研究紀要の寄稿については、この規定の定めるところによる。

(寄稿資格者)

第2条 本紀要の寄稿資格者は、次の各号のいずれかに該当する者とする。

1. 本学の専任職員であって、教員資格審査規定第2条に定める教員
2. 学内講師および本務校のない非常勤講師であって、委員会が寄稿資格を認めた者
3. 本学の事務員であって、1～2号との共同研究者
4. その他、学問的価値などを考慮して、特に委員会が認めた論文の寄稿者 (昭和60. 3. 19改正)

(未発表の原則)

第3条 寄稿論文は未発表のものに限る。

(論文の種類)

第4条 寄稿論文は原著論文のほか、研究ノート、報告、翻訳、書評、文献紹介などとする。(昭和60. 3. 19, 平成10. 7. 14改正)

(基準原稿枚数)

第5条 論文1篇の長さは、図・表・写真などを含め、400字詰用紙40枚を基準とする。(昭和60. 3. 19改正)

(1人1篇の原則)

第6条 寄稿論文は1人1篇とする。但し、共同研究の場合、もしくは2つ以上の原稿論文の合計が40枚を越えない場合には、複数の論文を認めることがある。

(原稿の訂正等)

第7条 委員会は、寄稿論文に対して必要な場合には、加筆、訂正、削除もしくは、掲載見送りを要求することがある。

(著者校正)

第8条 校正は著者校正とし、校正段階での原稿の変更は原則として認めない。

(抜刷)

第9条 抜刷は1篇につき40部を無料とし、それ以上については希望者の実費負担とする。(平成10. 7. 14改正)

(論文概要)

第10条 原著論文には、論文概要(例. 英文で200語程度)をつける。(平成10. 7. 14追加)

附 則

1. この規定の改廃には、教授会出席者の3分の2以上の同意を必要とする。
2. 昭和60年3月19日の改正により、第2条を削除し、第3条および第4条をまとめて第2条とし、以下2ヶ条ずつ繰り上げる。
3. この規定の改正条項は、昭和60年4月1日より施行する。
4. 校名変更に伴い、平成2年4月1日より規定名称を改める。
5. この規定の改正条項は、改正の日より施行する。

常磐短期大学研究紀要 第44号 (2015年度)

平成28 (2016) 年 3月31日発行

発行者 常 磐 短 期 大 学

〒310-8585 水戸市見和1丁目430番地の1

電 話 029-232-2511(代)

印刷所 山三印刷株式会社

〒311-4153 水戸市河和田町4433の33

編集委員会

委員長 宮田久美子

委 員 菅野 弘久 李 精

名城 邦孝 鈴木 範之

瀧口 泰行

(アルファベット順)

Bulletin of Tokiwa Junior College

No.44

Contents

Articles

- YASUDA Naomichi : The structure of disparity and human resource management
—In relation with new social risks — 1
- KANNO Hirohisa : Hoshino Toru's Criticism on Edith Sitwell 34

Research Note

- MURAKAMI Yachiyo, TERADA Kiyomi : A study of the effect on the child
development and nurturing by the nursery toilet environment 35

Report

- KAMISUKI Masako : Enhancement of Positive Learning at Tokiwa Jr. College 43

Translation

- MURAMATSU Toshiko : "Desirable English and Available English" 53

Tokiwa Junior College
March 2016